569-14
1200501516257
569
4

33. 9. 19

=283

岩波文庫
169—170

古今和歌集

尾上八郎校訂

岩波書店

569-14

嘉祿本　古今和歌集

古今和歌集は、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀友則に仰があつて、選ばしめられた歌集である。これが出來てから、後々に、勅撰歌集が相續き、古今集を加へて二十一部、いはゆる二十一代集が作り上げられた。

平安朝時代になつて、漢詩文の製作が盛になつた。且つ上にも嵯峨淳和二天皇の如き、好文の君があらせられたので、それらを選んで一書を作るべく、文學の士に命ぜられた。これで、我が國ではじめて、勅撰詩集が現はれた。この事は、嵯峨天皇の御時の弘仁から、淳和天皇の天長までに三度もあつた。この三集は、凌雲集、文華秀麗集、經國集である。

しかるに、その後おひ〳〵歌が多く試作せられた。外國の文學の形式を襲ふよりは、自國の語を用ゐ、調により、自己の懷抱を、殊更に支那化せしめずに、素直に發表する方が、どのくらゐ樂であり、且つ趣があるかもしれない。知らず識らず起つた自覺的態度は、日に日に歌の隆盛を來した。

以上の故で、勅撰詩集でなく、勅撰歌集を編纂すべき勅命が下つて、延喜年間に古今集は出來上つたのである。選者の一人の紀貫之は序文を書いて、「貫之らが、この世に生まれて、この事の時にあへるをなむ喜びぬる。人麻呂なくなりにたれど、歌のことゝとゞまれるかな。」と喜んで、更に、「歌のさまをも知り、事の心を得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。」と云つた。古は、貫之らよりいふ古で、專ら奈良朝を指し、今は、自分らの時代、乃ち延喜の御世を云つた。實に、此集を讀んで、自分らは、天邊の大月を仰ぐが如く、延喜の聖代をしのび、貫之等諸歌人の風姿を想見するのである。

古今集は、貫之等の手によつて成つて、奉獻せられたのである。この最初のものは、從つて民間には止まらぬわけである。しかし、古寫本は種々ある。それは、貫之の自筆といふものが首で、道風、佐理、行成、公任、俊賴、顯輔、清輔等の筆といふものが引きつゞく。平安朝時代の有名の書家及び歌人の手に寫されたといふ古今集は實に多い。しかし大抵斷片となつて存在して、世にいはゆる古筆愛好者によつて、尊重せられてゐる。これらの中で、俊賴の筆といふものと同樣な元永三年の奥書のものが最も完全で、三十卷整つてゐて、價値の多いものである。清輔の書寫といふものも、これに次ぐべきであらう。

しかし、今日世に流布してゐるものは、以上のものでなくして鎌倉時代の初期に、藤原定家が、貞應二年七月に書寫したものである。このものは、二條家に傳へて、證本とした。この二條家が、定家の後を正しく受けたものであるから、定家が尊崇せられるとともに、その宗家所傳の本は尊重せられ、從つて流布せられて、今日、古今集といへば、專らこれをいふこととなり、大抵の教科書、又註釋書は、これによつてゐるのである。今日は、古今集すなはち貞應本の狀態である。

定家の子の爲家から、定家の家は三つに分れた。乃ち二條家、毘沙門堂家、冷泉家である。毘沙門堂家ははやく跡を絶ち、二條家と冷泉家とが、續いた。その兩家は、自づから競爭の位置に立つた。この故に、兩家用ゐるところの本も、異なるに到つた。

定家は、すでに述べた貞應年間に、古今集の定本を作つたが、嘉祿二年四月にも、また一の證本を作つた。前者を貞應本と云ふと等しく、世に後者を嘉祿本と唱へた。二條家が前者を用ゐるとすると、その反對の位置にある冷泉家は、勢嘉祿本を用ゐることとなつた。

しかし、二條家は榮えて、その門流が廣がつたに反して、冷泉家は、特に花々しいところがなかつた。從つて、貞應本は、廣く用ゐられるに反して、嘉祿本は、書寫の範圍も甚だ狹く、殆んど世上に現はれてゐない有樣であつた。今日に於いても、この狀態は、變らずにある。

貞應本に比べて、嘉祿本が特にいゝと云ふのではない。定家が同じやうに校合したのであるから、異なるところが多いわけはない。しかし、少差はおのづから存する。これも、筆者の寫誤と認められないところもないが、また參考に供すべきものもある。これらをよく對照して見たならば、學者は、益するところが多いであらう。その異なるところは、專ら字句であるが、それの歌に限つて、大凡を擧げて見れば、(圈點は嘉祿本、括弧内は貞應本)左のやうである。

うつ(うゑ)しうへば秋なき時やさかざらん花こそ散らめ根さへかれめや

紅葉は袖にこきいれてもていでむ(でなむ)秋はかぎりと見む人のため

あかずして別るゝ袖のしらたまを(は)君がかたみとつゝみてぞゆく

北へゆく雁ぞなくなるつれてこし數はたらず(で)ぞかへるべらなる

するがなる田子の浦波たゝぬ日はあれども君をこひぬ日ぞなき(はなし)

風ふけば峯にわかるゝしらくものたえてつね(つれ)なき君が心か

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもるとみるがわびしき(さ)

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色(物)にぞありける

夏引の手びきの糸をくりかへしことしげくともたゝ(たえ)むと思ふな

我身から憂き世の中となづけ(なげき)つゝ人のためさへかなしかるらむ

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば(みれば)そでぞぬれける

篠の葉におくはつしもの夜をさむみしみはつくとも色にいでめやは(いでめや)

郭公けさなくこゑにおどろけば君を(が)わかれし時にぞありける

あふくまは霧立ちくもり(わたり)あけぬとも君をばやらじまてばすべなし

兩者いづれがいゝであらうか。學者は猶よく比較せられたい。

今日世間に、あまり貞應本ばかりが流布せられてゐるので、今こゝに、家藏の嘉祿本を公にしてみる。假名使も、送假名も、漢字も、大體原本通にして見た。たゞ、「礒上」、「いその神」、「松人」、「松」等の戯書は、「いそのかみ」、「待つ人」、「待つ」等に直した。「劍」、「南」も、「けん」、「なん」と改めて見た。又變體假名も、平假名に變へて見た。濁點と句讀點とは、讀者の便を計つてつけて置いた。原本の眞面目を知らうとする人は、これらを本にかへし、或は取り去つて見られたいのである。

昭和二年八月末日

校訂者しるす

古今和歌集

やまとうたは、人のこゝろをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るものきくものにつけて、いひいたせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものゝふの心をも、なぐさむるはうたなり。このうた、あめつちのひらけはじまりける時より、いできにけり。（あゝのうきはしのしたにて、女神を神となりたまへることをいへるうたなり。）

しかあれども、世につたはることは、ひさかたのあめにしては、したてるひめにはじまり、（したてるひめとは、あめわかみこのめなり。せうとの神のかたちを、かたにうつりてかがやくをよめるえびすうたなるべし。これらは、もじのかずもさだまらず、うたのやうにもあらぬこと、どいなり。）あらかねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける。ちはやぶる神世には、うたのもじもさだまらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともじはよみける。（すさのをのみことは、あゝてるおほむ神のこのかみなり。女とすみたまへんとて、いづものくにゝ宮づくりしたまふ時に、その所に、やいろのくものたつを見て、よみたまへるなり。やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを。）かくてぞ、花をめで、とりをうらやみ、かすみをあはれび、つゆをかなしぶ心ことばおほく、さまゞになりにける。とをき所も、いでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、たかき山も、ふ

もとのちりひぢよりなりて、あまぐもたなびくまでおひのぼれるがごとくに、このうたも、かくのごとくなるべし。なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり。おほさゝきのみかどの、なにはづにて、みことときこえける時、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、みとせになりにければ、王仁といふ人の、いぶかり思て、よみてたてまつりけるうたなり。この花は、梅の花をいふなるべし。あさかやまのことばゝ、うねめのたはぶれよりよみて、かづらきのおほきみを、みちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、かはらけとりて、よめるなり。これにぞ、おほきみの心とけにける。あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは。このふたうたは、うたのちゝはゝのやうにてぞ、てならふ人のはじめにもしける。そもく、うたのさまむつなり。からのうたにも、かくぞあるべき。そのむくさのひとつには、そへうた、おほさゝきのみかどをそへたてまつれるうた。

なにはづにさくやこの花冬ごもりいまはるべとさくやこの花、といへるなるべし。

ふたつには、かぞへうた。

さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて、といへるなるべし。

これは、たゞごとゝ、ひて、ものにたとへなどもせぬ物也。このうた、いかにいへるにかあらむ。その心えがたし。いつゝにたゞごとうたといへるなむ、これにはかなふべき。

みつには、なずらへうた。

きみにけさあしたのしものおきていなばこひしきごとにきえやわたらむ、といへるなるべし。

よつには、たとへうた。

我こひはよむともつきじありそ海のはまのまさごはよみつくすとも、といへるなるべし。

これは、よろづのくさ木、とりけだ物につけて、心を見するなり。このうたは、かくれたる所なむなき。されど、はじめのそへうたとおなじやうなれば、すこし、さまをかへたるなるべし。すまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり、このうたなどや、かなふべからむ。

いつゝには、たゞごとうた。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし、といへるなるべし。

これは、事のとゝのほり、たゞしきをいふ也。このうたの心、さらにかなはず。とめうたとやいふべからむ。山ざくらあくまでいろを見つるかな花ちらべくも風ふかぬ世に。

むつには、いはひうた。

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり、といへるなるべし。

これは、世をほめて、神につぐるなり。このうた、いはひうたとはみえず。むある。かすがのにわかなつみつゝよろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ。これらや、すこしかなふべからむ。おほよそ、むくさにわかれんことは、えあるまじき事になむ。

今の世の中、いろにつき、人の心花になりにけるより、あだなるうた、はかなきことのみいでくれば、いろごのみのいへに、むもれ木の人しれぬことゝなりて、まめなるところには、

花すゝきほにいだすべきことにも、あらずなりにたり。そのはじめをおもへば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さふらふ人々をめして、ことにつけつゝ、うたをたてまつらしめ給。あるは、花をこふとて、たよりなきところにまどひ、あるは月を思とて、しるべなきやみにたどれる、心〳〵を見たまひて、さかし、をろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さゞれいしにたとへ、つくば山にかけて、きみをねがひ、よろこび身にすぎ、たのしひ心にあまり、ふじのけぶりによそへて人をこひ、松虫のねに友をしのび、高砂、すみの江のまつも、あひをひのやうにおぼえ、おとこ山のむかしを思いでゝ、をみなへしのひとときをくねるにも、哥をいひてぞなぐさめける。又、はるのあしたに、花のちるを見、秋のゆふぐれに、このはのおつるをきゝ、あるは、としごとに、かゞみのかげに見ゆる雪と浪とをなげき、草のつゆ、水のあわを見て、我身をおどろき、あるは、きのふはさかえをこりて、時をうしなひ、世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは、松山の浪をかけ、野なかの水をくみ、秋はぎのしたばをながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるは、くれ竹のうきふしを人にいひ、よし野河をひきて、世の中をうらみきつるに、今は、ふじの山もけぶりたゝずなり、ながらのはしもつくるなり、ときく人は、うたにのみぞ心をなぐさめける。いにしへより、かくつたはるうちにも、文武天皇ならの御時よりぞ、ひろまりにける。かのおほむ世や、哥の心をもしろしめしたりけむ。かのおほむ時に、おほきみつのくらゐ、かきのもとの人まろなむ、うたのひじりなりける。これは、きみも、人も、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、龍田川にながるゝもみぢをば、みかどのおほむめに、錦と見たまひ、春のあした、よしのゝ山のさくらは、人まろが心には、くもかとのみなむおぼえける。又、山のべのあか人といふ人ありけり。うたにあやしくたへなりけり。人まろは、赤人がかみにたゝむ事かたく、あか人は、人まろがしもにたゝむことかたくなむありける。

てふれゝば。ほの〴〵とあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく守をしぞおもふ。赤人、春のゝにすみれつみにとこしわれぞ野をなつかしみひとよねにける。わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる。

ならのみかどの御うた、龍田川もみぢみだれてながるめりわたらばにしきかやたえなん。人まろ、梅のはなそれともみえず久かたのあまぎる雪のなべの人々ををきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとのより〳〵に、たえずぞありける。これよりさきのうたをあつめてなむ、万えふしふとなづけられたりける。ここに、いにしへのことをも、うたの心をもしれる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあれど、これかれ、えたる所、えぬ所たがひになむある。かの御時よりこのかた、としはもゝとせあまり、世はとつきになむなりにける。いにしへの事をも、うたをも、しれる人、よむ

人おほからず。いまこのことをいふに、つかさくらゐたかき人をば、たやすきやうなればいれず。そのほかに、ちかき世にその名きこえたる人は、すなはち、僧正遍昭は、うたのさまはえたれども、まことすくなし。たとへば、ゑにかけるをうなをみて、いたづらに心をうごかすがごとし。（あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か。はちすばのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく。さが野にてむまよりおちてよめる。名にめでゝおれるばかりぞたみなへしわれおちにきと人にかたるな。）ありはらのなりひらは、その心あまりて、ことばたらず。しぼめる花の、いろなくて、にほひのこれるがごとし。（月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして。おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの。ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな。）ふむやのやすひでは、ことばゝたくみにて、そのさま身におはず。いはゞ、あき人のよききぬきたらむがごとし。（吹からにのべのくさ木のしほるればむべ山かぜをあらしといふらむ。深草のみかどの御國忌に、草深き霜の谷にがけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ。）宇治山の僧きせむは、ことばかすかにして、はじめをはり、たしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、あかつきのくもにあへるがごとし。（わがいほはみやこのたつみしかぞすむよをうぢやまと人はいふなり。）よめるうたおほくきこえねば、かれこれかよはして、よくしらず。をのゝこまちは、いにしへのそとほりひめの流なり。あはれなるやうにてつよからず、いはゞよきをうなの、なやめる所あるにゝたり。つよからぬは、をうなのうたなればなるべし。（思つゝぬればや人の見えつらむゆめとしりせばさめざらましを いらみえでうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける。わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞおもふ。そとほりひめのうた、わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも。）大

伴のくろぬしは、そのさまいやし。いはゞ、たきゞおへる山人の、花のかげにやすめるがごとし。（思いでゝこひしきときははつかりのなきてわたると人はしらずや。鏡山いざたちよりて見てゆかむとしへぬる身は老やしぬると。）このほかの人々、その名きこゆる、のべにおふるかづらのはひゝろごり、はやしにしげきこのはのごとくにおほかれど、うたとのみおもひて、そのさましらぬなるべし。かゝるに、いま、すべらきのあめのしたしろしめすこと、よつの時こゝのがへりになむなりぬる。あまねきおほむうつくしみのなみ、やしまのほかまでながれ、ひろきおほむめぐみのかげ、つくば山のふもとよりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろ〳〵のことをすてたまはぬあまりに、いにしへのことをもわすれじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、今も見そなはし、のちの世にもつたはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記きのとものり、御書のところのあづかりきのつらゆき、さきのかひのさう官おふしかうちのみつね、右衞門の府生みぶのたゞみねらにおほせられて、万えふしふにいらぬふるきうた、みづからのをもたてまつらしめたまひてなむ。それがなかに、むめをかさずよりはじめて、ほとゝぎすをきゝ、もみぢをおり、雪をみるにいたるまで、又つるかめにつけて、きみをおもひ、人をもいはひ、秋はぎ、夏草を見てつまをこひ、あふさか山にいたりてたむけをいのり、あるは、春夏秋冬にもいらぬ、くさ〴〵の

うたをなむ、えらばせたまひける。すべて、千うたはたまき、なづけてこきむわかしふといふ。かくこのたび、あつめえらばれて、山した水のたえず、はまのまさごのかずおほくつもりぬれば、いまは、あすか河のせになるうらみもきこえず、さゞれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき。それまくらことば、春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋のよのながきをかこてれば、かつは人のみゝにおそり、かつは、うたの心にはぢおもへど、たなびくゝものたちゐ、なくしかのおきふしは、つらゆきらが、この世におなじくむまれて、この事の時にあへるをなむ、よろこびぬる。人まろなくなりにたれど、哥のこととゞまれるかな。たとひ、時うつり、事さり、たのしび、かなしび、ゆきかふとも、この哥の、もじあるをや。あをやぎのいとたえず、松のはのちりうせずして、まさきのかづら、ながくつたはり、とりのあと、ひさしくとゞまれらば、うたのさまをしり、ことの心をえたらむ人は、おほぞらの月をみるがごとくに、いにしへをあふぎて、今をこひざらめかも。

古今和歌集卷第一

春哥上

ふるとしに、春たちける日よめる　在原元方

年のうちに春はきにけり一とせをこぞとやいはむことしとやいはむ

はるたちける日よめる　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

題しらず　よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

二条のきさきの、はるのはじめの御うた

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらず　よみ人しらず

梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

雪の、木にふりかゝれるをよめる　素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

題しらず　よみ人しらず

心ざしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花とみゆらむ

ある人のいはく　さきのおほきおほいまうちぎみのうた也

二条のきさきの、とう宮のみやすん所ときこえける時、正月三日、おまへにめして、おほせごとあるあひだに、日はてりながら、雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ける

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき　ふむやのやすひで

雪のふりけるをよめる

霞たちこのめも春の雪ふれば花なきさとも花ぞちりける　きのつらゆき

はるのはじめによめる

春やとき花やをそきときゝわかむ鶯だにもなかずもあるかな　ふぢはらのことなお言直

春のはじめのうた

はるきぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふ　みぶのたゞみね

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　源まさすみ 當純近院右大臣男

谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる浪や春のはつ花　紀とものり

花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる　大江千里

鶯の谷よりいづるこゑなくば春くることをたれかしらまし　在原棟梁

春たてど花もにほはぬ山里は物うかるねに鶯ぞなく　よみ人しらず

題しらず

野べちかくいへゐしせれば鶯のなくなるこゑをあさなゝきく

かすが野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

春日野のとぶひのゝもりいでゝみよ今いくかありてわかなつみてん

み山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり

梓弓をして春雨けふふりぬあすさへふらばわかなつみてむ

仁和のみかど、みこにおましけるときに、人にわかなたまひける御うた

君がため春のゝにいでゝわかなつむ我衣手に雪はふりつゝ

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつれる　つらゆき

かすがのゝわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

寛平御時、きさいの宮の哥合によめる　源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつれる　つらゆき

我せこが衣はるさめふるごとにのべのみどりぞ色まさりける

あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさ緑いとよりかけて白つゆを玉にもぬける春の柳か

題しらず　よみ人しらず

百ちとりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥哉

かりのこゑをきゝて、こしへまかりける人を思てよめる　凡河内躬恒

春くれば鴈歸なり白雲の道ゆきぶりに事やつてまし

歸鴈をよめる　伊勢

春霞たつをみすてゝ行鴈は花なき里にすみやならへる

題しらず　よみ人しらず

折つれば袖こそにほへ梅のはなありとやこゝに鶯のなく

色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

やどちかく梅の花うへじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり

梅花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみぬる

梅花をゝりてよめる　源常左ベ臣左大將嵯峨源氏齊衡元年薨四十四　東三条左のおほいまうちぎみ

鶯の笠にぬふといふ梅花折てかざゝむおいかくるやと

題しらず　素性法師

よそにのみあはれとぞみし梅花あかぬ色かは折てなりけり

むめの花をゝりて、人にをくりける　ともの り

君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる

くらぶ山にてよめる　つらゆき

梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有ける

月夜に、梅花をおりて、と人のいひければ、おるとて

よめる　みつね

月夜にはそれともみえず梅花かを尋てぞしるべかりける

はるのよ梅花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるゝ

はつせにまうづるごとに、やどりける人の家に、ひさしくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむやどりはある、といひいたして侍ければ、そこにたてりける梅花をゝくりてよめる　つらゆき

人はいさ心もしらずふる里は花ぞむかしのかにゝほひける

水のほとりに、梅花さけりけるをよめる　伊勢

「春ごとにながるゝ川を花とみておられぬ水に袖やぬれなん

年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家に有ける梅花のちりけるをよめる　つらゆき

くるとあくとめかれぬ物を梅のはないつの人までうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の哥合のうた　よみ人しらず

梅がゝを袖にうつしてとゞめてば春はすぐともかたみならまし

素性法師

ちると見てあるべき物を梅のはなうたて匂の袖にとまれる　よみ人しらず

題しらず

ちりぬともかをだにのこせ梅花こひしき時の思いでにせむ　つらゆき

人の家にうへたる櫻の、花さきはじめたりけるを見て

よめる

ことしより春しりそむる櫻花ちるといふ事はならはざらなん　よみ人しらず

題しらず

山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ

又はさとゝをみ人もすさめぬ山ざくら

山櫻わが身にくれば春霞嶺にもおにも立かくしつゝ

清和母后明子太皇大后宮　昌泰三年正月一日崩七十二忠仁公女

そめとのゝきさきのおまへに、花がめに櫻の花をさゝ

せたまへるをみてよめる　さきのおほきおほいまうちぎみ　忠仁公

年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をしみれば物思もなし

なぎさの院にて、さくらを見てよめる　在原業平朝臣

世中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし　よみ人しらず

題しらず

いしはしる瀧なくもがな櫻ばなたをりてもこむみぬ人のため　そせい法師

山のさくらをみてよめる

見てのみや人にかたらむ櫻ばなてごとに折て家づとにせむ

花ざかりに京を見やりてよめる

みわたせば柳櫻をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける　とものり

櫻の花の本にて、年のおいぬる事をなげきてよめる

色もかもおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける　つらゆき

おれる櫻をよめる

誰しかもとめて折つる春霞たちかくすらむ山の櫻を

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつ

れる

櫻花さきにけらしな足引の山のかひよりみゆる白雲

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　とものり

みよしの丶山べにさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

やよひにうるふ月ありける年、よみける　伊勢

櫻花春くは丶れる年だにも人の心にあかれやはせぬ

さくらの花のさかりに、ひさしくとはざりける人の、

きたりける時によみける　よみ人しらず

あだなりとなにこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり

返し　なりひらの朝臣

けふこずばあすは雪とぞふりなましきえずは有とも花と見ましや

題しらず　よみ人しらず

ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそ櫻おらばおりてめ

折とらばおしげにもあるか櫻花いざやどかりてちるまではみむ

きのありとも

櫻色に衣はふかく染てきむ花のちりなむのちのかたみに

櫻の花のさけりけるを、見にまうできたりける人に、

よみてをくりける　みつね

我やどの花みがてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき

亭子院哥合の時よめる　伊勢

みる人もなき山里の櫻花外のちりなむ後ぞさかまし

古今和歌集卷第二

春哥下

題しらず　よみ人しらず

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはり行
まてといふにちらでしとまる物ならば何を櫻に思まさまし
殘なくちるぞめでたき櫻ばなありて世中はてのうければ
この里に旅ねしぬべしさくら花ちりのまがひに家ぢ忘て
うつせみの世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり

僧正へんぜうによみてをくりける　これたかのみこ惟喬文德第一

櫻花ちらばちらなんちらずとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて、さくらの花のちりけるをみてよめる　そうぐ法師承均

さくらちる花の所は春ながら雪ぞふりつゝきえがてにする

櫻の花のちり侍けるをみてよみける　　そせい法師

花ちらす風のやどりは誰かしる我にをしへよ行てうらみむ

うりむ院にて、さくらの花をよめる　　そうぐ法師

いざゝくら我もちりなんひとさかり有なば人にうきめ見えなん

あひしれりける人の、まうできてかへりにけるのちに、

よみて花にさしてつかはしける　　つらゆき

ひとめ見し君もやくると櫻ばなけふはまちみてちらばちらなん

山のさくらをみてよめる

春霞なにかくすらむ櫻花ちるまをだにもみるべき物を

心ちそこなひて、わづらひける時に、風にあたらじ、

とておろしこめてのみ侍けるあひだに、おれる櫻のち

りがたになれりけるを見てよめる　　藤原よるかの朝臣（典侍貞觀寛平延喜）

たれこめて春の行ゑもしらぬまにまちし櫻もうつろひにけり

東宮雅院（侍賢門北壬東）にて、さくらの花の、みかは水にちりてながれけるを見てよめる　　すがのゝ高世

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ

さくらのはなの、ちりけるをよみける　　つらゆき

ことならばさかずやはあらぬ櫻花みる我さへにしづ心なし

櫻のごとゝくちる物はなし、と人のいひければよめる

さくら花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風も吹あへぬ

櫻の花のちるをよめる　　きのとものり

久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

春宮のたちはきのぢんにて、さくらの花のちるをよめる　　藤原よしかぜ（良風）

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ

櫻のちるをよめる　　凡河内みつね

雪とのみふるだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹らむ

ひえにのぼりて、かへりまうできてよめる　　つらゆき

山たかみ見つゝ我こし櫻ばな風は心にまかすべらなり

題しらず　　大伴（一本）くろぬし

春雨のふるは涙かさくら花ちるをおしまぬ人しなければ

亭子院哥合のうた　　つらゆき

櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞ立ける

ならのみかどの御うた　　平城天皇也大同天子

ふる里となりにしならの宮こにも色はかはらず花は咲けり

春のうたとてよめる　　よしみねのむねさだ

花の色は霞にこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かぜ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　　そせい法師

花の木も今はほりうへじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

題しらず　　よみ人しらず

春の色のいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花のみゆらん

はるのうたとてよめる　　つらゆき

みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ

うりむゐんのみこのもとに、花見に、きた山のほとり

にまかれりける時によめる　　そせい

いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花の影かは

春のうたとてよめる

いつまでかのべに心のあくがれん花しちらずばちよもへぬべし

題しらず　　よみ人しらず

春ごとに花のさかりは有なめとあひみむ事はいのちなりけり

花のごとよのつねならばすぐしてし昔は又もかへりきなまし

ふく風にあつらへつくる物ならばこのひと本はよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花を折てけるかな

寛平御時きさいの宮の哥合のうた　　藤原おきかぜ

さく花はちくさながらにあだなれど誰かは春を怨はてたる

春霞色のちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

かすみたつ春の山べはとをけれど吹くる風は花のかぞする　在原元方

うつろへる花を見てよめる　みつね

花みれば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそしれ

題しらず　よみ人しらず

鶯の鳴野べごとにきてみればうつろふ花に風ぞ吹ける

吹風を鳴て怨よ鶯は我やは花に手だにふれたる　典侍洽子朝臣（寛平延喜掌侍典侍東所別當）

ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは

仁和の中將のみやすん所家に、哥合せむとてしける時に、よみける　藤原のちかげ（後蔭藏人右少將中納言有穩子）

花のちる事やわびしき春霞たつたの山の鶯のこゑ　そせい

鶯の鳴をよめる

こづたへばをのがは風にちる花を誰におほせてこゝらなくらん

うぐひすの、花の木にてなくをよめる　みつね

しるしなきねをも鳴かな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらず　よみ人しらず

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花を何かうらみむ世中に我身もともにあらん物かは　小野小町

花の色はうつりにけりな徒にわが身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に、哥合せんとしける時によめる　そせい

おしと思心はいとによられなんちる花ごとにぬきてとゞめむ

しかの山ごえに、女のおほくあへりけるによみてつかはしける　つらゆき

梓弓春の山邊を越くれば道もさりあへず花ぞちりける

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

春のゝにわかなつまむとこし物をちりかふ花に道はまどひぬ

山でらにまうでたりけるによめる

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける

寛平の御時、きさいの宮の哥合のうた

僧正へんぜう

吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花は見ましや

しがよりかへりけるをうなどもの、花山にいりて、ふぢの花のもとにたちよりて、かへりけるによみてをくりける

よそにみてかへらん人に藤花はひまつはれよ枝は折とも

家に、藤の花㊀さけりけるを、人のたちとまり見けるをよめる

みつね

我宿にさける藤浪立かへりすぎがてにのみ人のみるらん

題しらず

よみ人しらず

今もかもさきにほふらむ橘のこじまのさきの山吹の花

春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきの花

やま吹はあやなゝさきそ花みむとうへけん君がこよひこなくに

つらゆき

吉野川岸の山吹ふく風にそこのかげさへうつろひにけり

よしの川のほとりに、山吹のさけりけるをよめる

題しらず

よみ人しらず

かはづなく井での山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

この歌は、ある人のいはく、たちばなのきよともが歌也。清友贈太政大臣嵯峨后父

そせい

春の哥とてよめる

おもふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしが

みつね

春のとくすぐるをよめる

梓弓春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな

やよひに、鶯のこゑの、ひさしうきこえざりけるをよめる

つらゆき

なきとむる花しなければ鶯もはては物うくなりぬべらなり

やよひのつごもりがたに、山をこえけるに、山川より
花の流けるをよめる　ふかやぶ

花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり
春をゝしみてよめる　もとかた

おしめどもとゞまらなくに春霞歸道にも立ぬとおもへば
寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　おきかぜ

こゑたえずなけや鶯ひとゝせにふたゝびとだにくべき春かは
やよひのつごもりの日、花つみよりかへりける女ども
をみてよめる　みつね

とゞむべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふ心か
やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折
て人につかはしける　なりひら

ぬれつゝぞしゐて折つる年の内に春はいくかもあらじとおもへば
亭子院哥合のはるのはてのうた　みつね

けふのみと春をおもはぬ時だにも立ことやすき花の陰かは

古今和歌集卷第三

夏　哥

題しらず　よみ人しらず

我やどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

このうた、ある人のいく、柿本人麿が也。

紀としさだ

う月にさけるさくらをみてよめる

あはれてふ事をあまたにやらじとや春にをくれて獨さくらん

題しらず　よみ人しらず

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなんこぞのふるごゑ

伊勢

さ月こば鳴もふりなん郭公まだしき程のこゑをきかばや

よみ人しらず

さ月まつ花橘のかをかけば昔の人の袖のかぞする
いつのまにさ月きぬらむ足引の山郭公今ぞなくなる
けさきなきいまだ旅なる郭公花橘にやどはからなん

をとは山をこえける時に、時鳥のなくをきゝてよめる　紀友則

をとは山けさこえくれば郭公こずゑはるかに今ぞ鳴なる

郭公の、はじめてなきけるをきゝてよめる　そせい

郭公はつこゑきけばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた

ならのいその神でらにて、郭公のなくをよめる

いそのかみふるき都の郭公こゑばかりこそむかしなりけれ

題しらず　よみ人しらず

夏山になく時鳥心あらば物おもふ我にこゑなきかせそ
郭公鳴こゑきけば別にし舊里さへぞ戀しかりける
時鳥ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ものから
思いづるときはの山の郭公唐紅のふりいでゝぞなく

こゑはして涙はみえぬ郭公我衣手のひづをからなむ
葦引の山郭公折はへて誰かまさるとねをのみぞなく
今更に山へかへるな時鳥こゑの限は我やどになけ

やよやまて山時鳥事づてむ我世中にすみわびぬとよ　みくにのまち

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　紀友則

さみだれに物おもひをれば郭公夜深くなきていづち行らん
夜や暗き道やまどへる時鳥我やどをしも過がてになく

やどりせし花橘もかれなくになど時鳥こゑたえぬらん　大江千里

夏のよのふすかとすれば郭公なく一こゑにあくるしのゝめ　つらゆき

くるゝかとみればあけぬる夏のよをあかずとやなく山時鳥　みぶのたゞみね

夏山にこひしき人やいりにけむこゑふりたてゝなく郭公　紀秋岑

こぞの夏鳴ふるしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ　よみ人しらず

郭公のなくをきゝてよめる

五月雨の空もとゞろに郭公なにをうしとかよたゞなくらん　つらゆき

さふらひにて、をのこどものさけたうべけるにめして、

郭公まつうたよめ、とありければよめる　みつね

時鳥こゑもきこえず山びこは外になくねをこたへやはせぬ

山に郭公のなきけるを、きゝてよめる　つらゆき

郭公人待山になくなれば我うちつけにこひまさりけり

はやくすみける所にて、時鳥のなきけるをきゝてよめる　たゞみね

昔べや今もこひしき時鳥故郷にしもなきてきつらむ

郭公のなきけるをきゝてよめる　みつね

郭公我とはなしに卯花のうき世中になき渡るらん

はちすの露をみてよめる　僧正へんぜう

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月のおもしろかりける夜、あか月がたによめる　ふかやぶ

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづくに月やどるらん

となりより、とこ夏の花をこひにをこせたりければ、

おしみて、この哥をよみてつかはしける　みつね

ちりをだにすへしとぞ思さきしよりいもと我ぬるとこ夏の花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋と行かふそらのかよひぢはかたへ涼しき風や吹らん

古今和歌集卷第四

秋哥上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかにみえねども風のをとにぞおどろかれぬる

秋立日、うへのをのこども、かものかはらに、かはせうえうしけるともにまかりてよめる　つらゆき

河風の涼しくもあるか打よする浪とゝもにや秋はたつらん

題しらず　よみ人しらず

我せこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋のはつ風

昨日こそ早苗とりしかいつのまにいなはそよぎて秋風の吹

秋風の吹にし日より久かたのあまの河原にたゝぬ日はなし

久かたの天河原のわたしもり君渡なばかぢかくしてよ

漢川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

こひ〳〵て逢夜は今よひ天川霧立わたりあけずもあらなむ

寛平御時、なぬかの夜、うへにさふらふをのこども哥たてまつれ、とおほせられける時に、人にかはりてよめる　とものり

天河淺せ白浪たどりつゝ渡はてねばあけぞしにける

おなじ御時きさいの宮の哥合のうた　藤原おきかぜ

契けむ心ぞつらき七夕の年に一たびあふはあふかはなぬかのよゝめる　みつね

年ごとにあふとはすれど七夕のぬる夜のかずぞすくなかりける

織女にかしつる絲のうちはへて年のをながく戀やわたらむ

題しらず　素性

今よひこむ人にはあはじ織女のひさしき程にまちもこそすれ

七日の夜の曉によめる　源宗于朝臣

今はとてわかるゝ時は天河わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

やうかの日よめる　みぶのたゞみね

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみまちわたるべき

題しらず　よみ人しらず

木のまよりもりくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり

おほかたの秋くるからに我身こそしき物とおもひしりぬれ

我ためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけば先ぞかなしき

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひ行をかぎりと思へば

獨ぬる床は草葉にあらねども炙くるよひはつゆけかりけり

是貞のみこの家の哥合のうた（昌泰元年仁和第二右中將）

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物おもふ事のかぎりなりける

かむなりのつぼに、人々あつまりて、秋の夜おしむうたよみけるついでによめる　みつね

かくばかりおしと思よを徒にねてあかすらむ人さへぞうき

題しらず　よみ人しらず

白雲にはね打かはしとぶかりの數さへ見ゆる秋のよの月

さよ中と夜はふけぬらし鴈がねのきこゆる空に月わたるみゆ

これさだのみこの家の哥合によめる　大江千里

月みればちゞに物こそ悲けれ我身ひとつの秋にはあらねど

久かたの月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらん　たゞみね

月をよめる　在原元方

秋のよの月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人のもとにまかれりける夜、きり〳〵すのなきけるを

きゝてよめる　藤原忠房

蟋いたくなゝきそ秋のよのながき思ひは我ぞまされる

是貞のみこの家の哥合のうた　としゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらず鳴虫はわがごと物やかなしかるらむ

題しらず　よみ人しらず

秋はぎも色づきぬれば蟋我ねぬごとやよるはかなしき

烽の野は露こそことにさむからし草むらごとに虫のわぶれば

君忍草にやつるゝ故郷は松虫のねぞかなしかりける

秋のゝに道もまど(迷)ひぬ松むしのこゑするかたに宿やからまし

あきのゝに人松虫の聲すなり我かとゆきていざとぶらはん

紅葉ばのちりてつもれる我やどにたれを松虫こゝらなくらむ

日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬとおもへば山の陰にぞ有ける

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる　在原元方

まつ人にあらぬ物からはつかりのけさなくこゑのめづらしき哉

これさだのみこの家の哥合のうた　とものり

秋風にはつかりがねぞきこゆなるたが玉づさをかけてきつらん

題しらず　よみ人しらず

我門にいなおほせどりのなくなべにけさ吹風に鴈はきにけり
いとはやも鳴ぬる鴈か白露の色どる木々ももみぢあへなくに
春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりの上に
夜を寒み衣かりがねなくなべに萩のしたばもうつろひにけり

この哥は、ある人のいはく、柿本の人まろかなりと

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる舟はあまのと渡かりにぞ有ける
かりのなきけるをきゝてよめる　みつね
うき事を思つらねて鴈金のなきこそわたれ秋のよな〳〵
是貞のみこの家の哥合のうた　たゞみね
山里は冬こそことにわびしけれ鹿のなくねにめをさましつゝ
おく山に紅葉ふみわけなくしかのこゑきく時ぞ秋はかなしき
題しらず　よみ人しらず

秋萩にうらびれをれば葦引の山したどよみ鹿のなくらむ
あき萩をしがらみふせてなくしかのめにはみえずてをとのさやけさ
これさだのみこの家の哥合によめる　藤原としゆきの朝臣
秋はぎの花さきにけり高砂のおのへの鹿は今や鳴らむ
むかしあひしりて侍ける人の、秋のゝにあひて、物がたりしけるついでによめる　みつね
あき萩のふるえにさける花みればもとの心は忘ざりけり
題しらず　よみ人しらず
秋はぎのしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにする
なきわたるかりの涙やおちつらむ物思やどのはぎの上の露
はぎのつゆ玉にぬかむととれば露けぬよしみむ人は枝ながら見よ
ある人のいはく、この哥はならのみかどの御哥也と
おりて見ばおちぞしぬべき秋はぎの枝もとをゝにをけるしらつゆ
萩が花ちるらむをのゝつゆじもにぬれてをゆかむさよはふくとも

是貞のみこの家の哥合によめる　文室あさやす

秋の〻にをく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ

題しらず　僧正遍昭

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな

僧正へんぜうがもとに、ならへまかりける時に、おと

こ山にて女郎花を見てよめる　ふるのいまみち

をみなへしうしと見つゝぞ行すぐるおとこ山にしたてりとおもへば

是貞のみこの家の哥合のうた　としゆきの朝臣

秋の〻にやどりはすべし女郎花なをむつまじみたびならなくに

題しらず　をの〻よし木

女郎花おほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をやたちなん

朱雀院のをみなへしあはせに、よみてたてまつりける左のおほいまうちぎみ本院

をみなへし秋の野風に打なびき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣三条右大臣

秋ならであふ事かたき女郎花あまのかはらにおいぬ物ゆへ　つらゆき

たが妹にあらぬ物ゆへをみなへしなぞ色にいでゝまだきうつろふ　みつね

つまこふる鹿ぞ鳴なる女郎花をのがすむのゝ花としらずや

をみなへし吹すぎてくる秋風はめには見えねどかこそしるけれ　たゞみね

人の見る事やくるしき女郎花秋ぎりにのみたちかくるらん

獨のみながむるよりはをみなへし我すむやどにうへてみましを

ものへまかりけるに、人の家に、女郎花うへたりけるを　兼覽王

みてよめる

女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれば

寛平御時、藏人所のをのこども、さがのに、はな見む

とてまかりたりける時、かへるとて、みなうたよみけ

るついでによめる

花にあかでなにかへるらむ女郎花おほかるのべにねなまし物を　平さだぶん

これさだのみこの家の哥合によめる

なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとにのべをにほはす　としゆきの朝臣

ふぢばかまをよみて、人につかはしける

やどりせし人のかたみか藤ばかまわすられがたきかにほひつゝ　つらゆき

蘭をよめる

主しらぬかこそにほへれ秋のゝにゝがぬぎかけしふぢばかまぞも　そせい

題しらず

今よりはうへてだに見じ花すゝきほにいづる秋はかなしかりけり　平定文

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

秋のゝの草のたもとか花薄ほにいでゝ招袖とみゆらん　在原むねやな

我のみやあはれと思はん蛬なくゆふかげの山となでしこ　素性法師

題しらず

緑なるひとつ草とぞ春はみし秋は色々の花にぞ有ける　よみ人しらず

百くさの花のひもとく秋のゝに思たはれむ人なとがめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてのゝちはうつろひぬとも

仁和のみかど、みこにおはしましける時、ふるのたき

御覽ぜんとておはしましけるみちに、遍昭がはゝの家

にやどりたまへる時に、庭を秋の野につくりて、おほ

むものがたりのついでに、よみてたてまつりける　僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋ののらなる

古今和歌集卷第五

秋哥下

これさだのみこの家の哥合のうた　文室やすひで

吹からに秋の草木のしほるればむべ山風を嵐といふらん

草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける

秋の哥合しける時によめる　紀よしもち朝臣

紅葉せぬときはの山は吹風のをとにや秋をきゝ渡らん

題しらず　よみ人しらず

霧たちて鴈ぞ鳴なるかたをかの朝の原は紅葉しぬらん

神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびの杜

千はやぶる神なび山のもみちばに思はかけじうつろふものを

貞觀御時、綾綺殿のまへに梅の木ありけり、西の方に

させりける枝の、もみぢはじめたりけるを、うへにさぶらふをのこどもの、よみけるついでによめる　藤原勝臣

おなじえをわきて木のはのうつろふは西こそ秋の始なりけれ

いし山にまうでける時、をとは山の紅葉をみてよめる　つらゆき

秋風の吹にし日よりをとは山峯のこずゑも色付にけり

これさだのみこの家の哥合によめる　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちゞにそむらん

秋のよの露をばつゆとをきながらかりの涙やのべをそむらん　壬生忠峯

題しらず

秋の露色〳〵ことにをけばこそ山の木のはのちぐさなるらめ　よみ人しらず

もる山のほとりにてよめる

白露も時雨もいたくもる山はしたばのこらず色付にけり　つらゆき

秋のうたとてよめる　在原元方

雨ふれどつゆももらじをかさとりの山はいかでかもみぢそめけむ

神のやしろのあたりをまかりける時に、いがきのうちのもみぢを見てよめる　つらゆき

千はやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

これさだのみこの家の哥合によめる　たゞみね

雨ふれば笠とり山のもみちばゝ行かふ人の袖さへぞてる

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　よみ人しらず

ちらねどもかねてぞおしきもみちばゝ今は限の色とみつれば

やまとのくにゝまかりける時、さほ山に、きりのたてりけるをみてよめる　紀のとものり

たがための錦なればか秋ぎりのさほの山べを立かくすらむ

これさだのみこの家の哥合のうた　よみ人しらず

秋霧はけさはなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん

秋の哥とてよめる　坂上これのり

さほ山のはゝその色はうすけれど秋は深くも成にけるかな　在原なりひらの朝臣

人のせんざいに、きくにむすびつけてうへける

うつしうへば秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへかれめや　としゆきの朝臣

寛平御時、きくの花をよませ給ける

久かたの雲のうへにてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

このうたは、まだ殿上ゆるされざりける時に、めしあげられてつかうまつれるとなむ

これさだのみこの家の哥合の哥　きのとものり

露ながらおりてかざゝむ菊花おいせぬ秋のひさしかるべく

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　大江千里

栽し時花まちどをにありしきくうつろふ秋にあはむとや見し

おなじ御時せられける菊あはせに、すはまをつくりて、

きくの花うへたりけるに、くはへたりけるうた、ふき

あげのはまのかたに、きくうへたりけるによめる　すがはらの朝臣（延喜元年以後贈位以前也仍注菅朝臣）

秋風の吹あげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

仙宮に、菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路のきくの露のまにいつかちとせを我はへにけん

菊の花のもとにて、人の人まてるかたをよめる　とものり

花みつゝ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

おほさはの池のかたに、きくうへたるをよめる

一もとゝ思し菊をおほさはの池の底にもたれからへけん

世中のはかなき事を思けるおりに、きくの花をみてよめる　つらゆき

秋の菊にほふ限はかざしてん花よりさきとしらぬ我身を

しらぎくの花をよめる　凡河内躬恒

心あてにおらばやおらんはつしものをきまどはせる白菊の花

これさだのみこの家の哥合のうた　よみ人しらず

色かはる秋の菊をばひとゝせにふたゝびにほふ花とこそみれ

仁和寺に菊花めしける時に、哥そへてたてまつれ、と
おほせられければ、よみてたてまつりける　平さだぶん

秋をゝきて時こそ有けれ菊花うつろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を、うつしうへたりけるをよめる　つらゆき

さきそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらず　よみ人しらず

さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへ見よとてらす月影

宮づかへひさしうつかうまつらで、山ざとにこもり侍けるによめる　藤原關雄治部少輔五位

おく山のいはがき紅葉ちりぬべしてる日の光みる時なくて

題しらず　よみ人しらず

龍田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなむ

この哥は、ある人、ならのみかどの御哥也となむ申

たつ田河もみちばながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又は、あすかゞはもみちばながる　此哥不注人丸哥同他本

こひしくばみてもしのばむ紅葉ばを吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへずちりぬるもみちばのゆくゑさだめぬ我ぞかなしき

あきはきぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけて更にやとはんもみちばのふりかくしてし道と見ながら

炑の月山邊さやかにてらせるはおつる紅葉のかずをみよとか

吹風の色のちくさに見えつるは秋の木のはのちればなりけり

せきを

霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のをればかつちる

うりむゐんの木のかげに、たゝずみてよみける　僧正へむぜう

侘人のわきてたちよる木のもとはたのむ陰なく紅葉ちりけり

二条の后の、春宮のみやす所と申ける時に、御屏風に、

たつた河にもみぢながれたるかたをかけりけるを題に

てよめる　そせい

もみちばの流てとまるみなとには紅深き浪や立らむ　なりひらの朝臣

千はやぶる神世もきかず龍田川から紅に水くゞるとは

これさだのみこの家の哥合のうた　としゆきの朝臣

我きつるかたもしられずくらぶ山木々の木のはのちるとまがふに

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ　たゞみね

北山に紅葉おしむとて、まかれりける時によめる　つらゆき

みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるの錦なりけり

秋のうた　かねみの王

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木のはのぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍ける時、紅葉を見てよめる　つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする

神なび山をすぎて、龍田川をわたりける時に、紅葉の流けるをみてよめる　きよはらのふかやぶ

神なびの山をすぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる　ふぢはらのおきかぜ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

白浪に秋の木のはのうかべるをあまのながせる舟かとぞみる　坂上これのり

たつた川のほとりにてよめる

紅葉ばの流ざりせば龍田河水の秡をば誰かしらまし　はるみちのつらき

しがの山ごえにてよめる

山河に風のかけたるしがらみは流もあへぬもみぢなりけり　みつね

池のほとりにて、紅葉のちるをよめる

風ふけばおつる紅葉ば水きよみちらぬ影さへ底に見えつゝ

亭子院の御屏風のゑに、河わたらんとする人の、もみぢのちる木のもとに、むまをひかへてたてるをよませ給ければ、つかうまつりける

立とまりみてをわたらんもみちばゝ雨とふるとも水はまさらじ
　　たゞみね

これさだのみこの家の哥合のうた

山田もる秋のかりいほにをくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり
　　よみ人しらず

題しらず

ほにもいでぬ山田をもると藤衣いなばの露にぬれぬ日はなし

かれる田におふるひづちのほにいでぬは世を今更に秋はてぬとか

北山に、僧正へんぜうとたけがりしにまかれりけるに
　　そせい法師

よめる

紅葉ばゝ袖にこきいれてもていでん秋は限とみむ人のため

寛平御時、ふるき哥たてまつれ、とおほせられければ、

龍田川もみちばながるといふ哥をかきて、そのおなじ
　　おきかぜ

心をよめりける

み山よりおちくる水の色みてぞ秋は限とおもひしりぬる

秋のはつる心を、たつた河におもひやりてよめる　つらゆき

年ごとにもみちばながす龍田川みなとや秋の泊なるらん

ながつきのつごもりの日、大井にてよめる

ゆふづく夜をぐらの山に鳴鹿のこゑのうちにや秋はくるらん
　　みつね

おなじつごもりの日よめる

道しらば尋もゆかむもみちばをぬさとたむけて秋はいにけり

古今和歌集卷第六

冬　哥

題しらず　　讀人しらず

龍田山河錦をりかく神無月時雨の雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる　　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

題しらず　　よみ人しらず

おほぞらの月のひかりしきよければ影みし水ぞまづ氷ける

夕されば衣手さむしみよしのゝ山にみ雪ふるらし

今よりはつぎてふらなん我宿のすゝきをしなみふれる白雪

ふる雪はかつぞけぬらし葦引の山のたぎつせをとまさるなり

この川にもみち葉ながるおく山の雪けの水ぞいままさるらし

古郷はよし野の山しちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし
我宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ
紀貫之

冬の哥とてよめる

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける
紀あきみね

しがの山ごえにてよめる

白雪の所もわかずふりしけば岩ほにもさく花とこそみれ
ならの京にまかれりける時に、やどれりける所にてよめる
さかのうへのこれのり

みよし野の山の白雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり
ふぢはらのおきかぜ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞみる
壬生忠峯

みよしの丶山の白雪ふみわけて入にし人のをとづれもせぬ
白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思きゆらむ

雪のふれるをみてよめる

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思きゆらん
凡河内みつね

ゆきのふりけるをよみける

冬ながらそらより花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん
きよはらのふかやぶ

雪の、木にふりかゝれりけるをよめる

冬ごもり思かけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける
つらゆき

やまとのくに丶まかれりける時に、雪のふりけるをみてよめる

あさぼらけ在明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪
坂上これのり

題しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め
よみ人しらず

梅花それとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば

この哥、ある人のいはく、柿本の人丸が哥なり

むめの花に、雪のふれるをよめる
小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく
　雪のうちの梅花をよめる　　きのつらゆき

梅のかのふりをける雪にまがひせば誰かことゞわきておらまし
　ゆきのふりけるをみてよめる　　紀とものり

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきておらまし
　物へまかりける人をまちて、しはすのつごもりによめる　　みつね

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はをとづれもせず
　年のはてによめる　　在原元方

荒玉のとしのをはりになるごとに雪も我身もふりまさりつゝ
　寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　　よみ人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつゐにもみぢぬ松もみえけれ
　年のはてによめる　　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか川流てはやき月日なりけり

哥たてまつれ、とおほせられし時に、よみてたてまつれる　　きのつらゆき

行としのおしくもあるかなます鏡みる影さへにくれぬと思へば

古今和歌集卷第七

賀　哥

題しらず　　よみ人しらず

我君はちよにやちよにさゞれいしの巖と成て苔のむすまで

渡津海の濱のまさごをかぞへつゝ君が千とせのありかずにせむ

しほの山さしでのいそにすむ千鳥君がみよをばやちよとぞなく

我よはひ君がやちよに取そへてとゞめをきては思いでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に、七十の賀たまひける時の御うた

かくしつゝとにもかくにもながらへて君がやちよにあふよしもがな

仁和のみかどの、みこにおはしましける時に、御をばのやそぢの賀に、しろがねをつゝにつくりけるを見て、

かの御をばにかはりてよみける　僧正へんぜう

ちはやぶる神やきりけむつくからにちとせの坂もこえぬべらなり

ほりかはのおほいまうちぎみの四十の賀、九条の家にてしける時よめる 昭宣公貞観十四年右大臣左大將　在原業平朝臣十七年四十

櫻花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

貞辰清和第七さだときのみこの、をばのよそちの賀を、大井にてしける日よめる

亀のおの山のいはねをとめておつる瀧の白玉千世のかずかも　きのこれをか家本用之ノリマヤ或説ニ惟熙

貞保一品式部卿清和第二号南宮母二条后延長二年薨さだやすのみこの、きさいの宮の五十賀たてまつりける御屏風に、櫻の花のちるしたに、人の花みたるかたかけるをよめる

いたづらにすぐる月日はおもほえで花みてくらす春ぞすくなき　藤原おきかぜ

本康一品式部卿延喜元薨号八條宮母従四位上紀種子もとやすのみこの七十の賀の、うしろの屏風によみてかきける　きのつらゆき

春くれば宿に先さく梅花君がちとせのかざしとぞみる　そせい法師

いにしへにありきあらずはしらねどもちとせのためし君にはじめむ

ふしておもひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらむ我君のため　在原しげはる

藤原三善が、六十の賀によみける

鶴亀も千とせのゝちはしらなくにあかぬ心にまかせはてゝん

この哥は、ある人、在原のときはるがともいふ

よしみねのつねなりが、よそぢの賀に、むすめにかはりてよみ侍ける

萬世を松にぞ君をいはひつるちとせのかげにすまむと思へば　そせい法師

滿子内大臣高藤二女延喜十七年従二位奉養延喜帝内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十賀しける時に、定國大納言右大將延喜八年七月日薨四十四季のゑかけるうしろの屏風に、かきつけたりける

た

かすがのにわかなつみつゝ萬世をいはふ心は神ぞしるらん

山高みくもゐに見ゆる櫻花心の行ておらぬ日ぞなき

夏

めづらしきこゑならなくに時鳥こゝらの年をあかずもあるかな

秋

住の江の松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつ白なみ

千鳥なくさほの河ぎり立ぬらし山のこのはも色まさりゆく

秋くれど色もかはらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ山した風にはなぞちりける

文德太子保明親王延喜三年誕生四年二月十日立太子十六年四月元服春宮のむまれたまへりける時に、まいりてよめる　典侍藤原よるかの朝臣　廿三年三月薨廿一

峯高き春日の山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり

古今和歌集卷第八

離別哥

題しらず　在原行平朝臣

立わかれいなばの山の峯におふる松としきかば今歸りこむ

すがるなく秋のはぎ原あさたちて旅行人をいつとかまたむ　よみ人しらず

限なき雲ゐのよそにわかるとも人を心にをくらざむやは

をのゝちふるが、みちのくのすけにまかりける時に、

はゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

さだときのみこの家にて、藤原きよふが、あふみのすけにまかりける時に、むまのはなむけしけるよゝめる　きのとしさだ

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人に、よみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞立別なばこひしかるべし　きのつらゆき

人のむまのはなむけにてよめる

おしむからこひしきものを白雲のたちなむのちはなに心ちせん

ともだちの、人のくにへまかりけるによめる　在原しげはる

別てはほどをへだつとおもへばやかつ見ながらにかねてこひしき

あづまの方へまかりける人に、よみてつかはしける　いかこのあつゆき

おもへども身をしわかねばめにみえぬ心を君にたぐへてぞやる

あふさかにて、人をわかれける時よめる　なにはのよろづを万雄

相坂の關しまさしき物ならばあかずわかるゝ君をとゞめよ

題しらず　よみ人しらず

唐衣たつ日はきかじあさつゆのをきてしゆけばけぬべき物を

この哥は　ある人、つかさをたまはりて、あたらしきめにつきて、年へて

すみける人をすてゝ、たゞあすなんたつ、と許いへりける時に、ともかう

もいはで、よみてつかはしける

ひたちへまかりける時に、藤原のきみとしに、よみて

つかはしける　寵或本無此名

あさなけにみべきゝみとしたのまねば思立ぬる草枕なり

きのむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家に

やどりて、あかつきいでたつとて、まかり申ければ、

女のよみていだせりける　よみ人しらず

えぞしらぬ今心見よいのちあらば我やわするゝ人やとはぬと

あひしりて侍ける人の、あづまのかたへまかりけるを、

をくるとてよめる　ふかやぶ

雲ゐにもかよふ心のをくれねばわかると人に見ゆばかりなり

ともの、あづまへまかりける時によめる　よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくだく旅かな

みちのくにへまかりける人に、よみてつかはしける　つらゆき

しら雲のやへにかさなるをちにてもおもはむ人に心へだつな

人をわかれける時によみける

別てふ事は色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

あひしりける人の、こしのくにゝまかりて、年へて京にまうできて、又かへりける時によめる　凡河内みつね

かへる山なにそはありてあるかひもきてもとまらぬ名にこそ有けれ

こしのくにへまかりける人に、よみてつかはしける

よそにのみ戀やわたらむしら山の雪見るべくもあらぬ我身か

をとはの山のほとりにて、人をわかるとてよめる　つらゆき

をとは山こだかくなきて時鳥君が別をおしむべらなり

藤原のゝちかげが、からものゝつかひに、なが月のつごもりがたにまかりけるに、うへのをのこども、さけたうびけるついでによめる

藤原兼茂延喜元年參議

もろともに鳴てとゞめよ蛬秋の別はおしくやはあらぬ

平もとのり元慶八右門尉

秋ぎりのともに立いでゝ別なばはれぬ思ひにこひや渡らん

源のさねが、つくしへゆあみむとてまかりける時、山ざきにて、わかれおしみける所にてよめる　しろめ

命だに心にかなふ物ならば何か別のかなしからまし

山ざきより、神なびの森まで、をくりに人々まかりて、かへりがてにして、別おしみけるによめる　源さね右近少將實

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざ歸なむ

今はこれよりかへりね、とさねがいひけるおりによみける

藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず

藤原のこれをかゞ、むさしのすけにまかりける時、をくりにあふさかをこゆとてよみける

つらゆき

かつこえて別もゆくか相坂は人だのめなる名にこそありけれ
おほえのちふるが、こしへまかりけるむまのはなむけ
によめる　藤原かねすけの朝臣

君が行こしの白山しらねども雪のまに〳〵跡はたづねむ
人の花山にまうできて、ゆふさりつかた歸りなむとし
ける時によめる　僧正へんぜう

夕暮のまがきは山と見えなゝむよるはこえじとやどりとるべく
山にのぼりてかへりまうできて、人々別けるついでに
よめる　幽仙法師

別をば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに〳〵
うりむゐんのみこの、舍利會に、山にのぼりてかへり
けるに、櫻の花のもとにてよめる　僧正へんぜう

山風に櫻吹まきみだれなむ花のまぎれにたちとまるべく
幽仙法師

ことならば君とまるべくにほはなんかへすは花のうきにやはあらぬ
仁和のみかど、みこにおはしましける時に、ふるのた
き御覽じにおはしまして、かへりたまひけるによめる　兼藝法師

あかずしてわかるゝ涙瀧にそふ水まさるとやしもはみるらん
かむなりのつぼにめしたりける日、おほみきなどたう
べて、雨のいたくふりければ、ゆふさりまで侍て、ま
かりいでけるおりに、さかづきをとりて　つらゆき

秋はぎの花をば雨にぬらせども君をばましておしとこそおもへ
とよめりける返し　兼覽王

おしむらむ人の心をしらぬまに秋の時雨と身ぞふりにける
かねみのおほきみに、はじめて物がたりしてわかれけ
る時によめる　みつね

わかるれどうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきになにをこひまし
題しらず　よみ人しらず

あかずしてわかるゝ袖の白玉を君がかたみとつゝみてぞゆく

限なくおもふ涙にそぼちぬる袖はかはかじあはむ日までに

かきくらしことはふらなん春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめん

しゐて行人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふまでちれ

しがの山ごえにて、いし井のもとにて、ものいひける

人の別けるおりによめる　つらゆき

結手の滴にゝごる山の井のあかでも人に別ぬるかな

みちにあへりける人のくるまに、物をいひつきて、わかれける所にてよめる　とものり

したのおびの道はかたゞ〳〵わかるとも行廻てもあはむとぞおもふ

古今和歌集巻第九

羇旅歌

もろこしにて、月をみてよみける　安倍仲麿

あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

このうたは、むかし、なかまろを、もろこしに物ならはしにつかはしたりけるに、あまたの年をへて、えかへりまうでこざりけるを、このくにより、又つかひまかりいたりけるにたぐひて、まうできなむとて、いでたちけるに、めいしうといふ所のうみべにて、かのくにの人、むまのはなむけしけり、よるになりて、月の、いとおもしろくさしいでたりけるをみてよめる、となむかたりつたふる

おきのくにゝながされける時に、船にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける　小野たかむらの朝臣

わだの原やそしまかけて漕いでぬと人にはつげよあまのつり舟

題しらず　よみ人しらず

宮こいでゝけふみかのはら泉川かは風さむし衣かせやま

ほの〳〵とあかしの浦のあさ霧に嶋がくれ行舟をしぞおもふ

この哥は、ある人のいはく、柿本人麿が哥也

あづまの方へ、友とする人、ひとりふたりいざなひていきけり、みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その河のほとりに、かきつばたいとおもしろくさけりけるを見て、木かげにおりゐて、かきつばたといふいつもじを、くのかしらにすへて、たびの心をよまむとてよめる

から衣きつゝなれにしつましあればはる〳〵きぬるたびをしぞ思

在原業平朝臣

むさしのくにと、しもつふさのくにとの中にある、すみだ川のほとりにいたりて、宮この、いとこひしうおぼえければ、しばし河のほとりにおりゐて思やれば、かぎりなくとをくもきにけるかな、とおもひわびてながめをるに、わたしもり、はや舟にのれ、日くれぬ、といひければ、舟にのりてわたらむとするに、みな人ものわびしくて、京に思人なくしもあらず、さるおりに、しろき鳥の、はしとあしとあかきが、河のほとりにあそびけり、京にはみえぬとりなりければ、みな人見しらず、わたしもりに、これはなにとりぞ、といひければ、これなむみやこどり、といひけるをきゝてよめる

名にしおはゞいざこと〻はむ宮こどり我おもふ人は有やなしやと

題しらず　よみ人しらず

北へ行鴈ぞなくなるつれてこしかずはたらずぞかへるべらなる

この哥は、ある人、おとこ女もろともに、人のくにへまかりけり、おとこ

まかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり京へかへりけるみちに、かへるかりの、なきけるをきゝてよめる、となむいふ

あづまの方より、京へまうでくとてみちにてよめる　お　と王生上じなりが女

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらん

こしのくにへまかりける時、しら山をみてよめる　み　つ　ね

きえはつる時しなければこしぢなるしら山のなは雪にぞ有ける

あづまへまかりける時、みちにてよめる　つ　ら　ゆ　き

いとによる物ならなくに別ぢの心ぼそくもおもほゆるかな

かひのくにへまかりける時、みちにてよめる　み　つ　ね

よを寒みをくはつしもをはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

たぢまのくにのゆへまかりける時に、ふたみのうらといふ所にとまりて、ゆふさりのかれいひたうべけるに、ともにありける人々の、うたよみけるついでによめる　ふぢはらのかねすけ

ゆふづくよおぼつかなきを玉匣ふたみの浦はあけてこそみめ

これたかのみこのともに、かりにまかりける時に、あまの河といふ所の、かはのほとりにおりゐて、さけなどのみけるついでに、みこのいひけらく、かりして、あまのかはらにいたる、といふ心をよみて、さかづきはさせ、といひければよめる　在原業平朝臣

かりくらしたなばたつめに宿からむ天の河原に我はきにけり

みこ、此うたを、返々よみつゝ、返しえせずなりにければ、ともに侍てよめる　きのありつね

ひとゝせにひとたびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思

朱雀院の、ならにおはしましける時に、たむけ山にてよみける　すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵　素性法師

たむけにはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

古今和歌集卷第十

物名

うぐひす　藤原としゆきの朝臣

心から花のしづくにそぼちつゝうぐひすとのみ鳥のなくらむ

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれやまちわびて鳴なるこゑの人をとよむる

うつせみ　在原しげはる

浪のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからんや

返し　壬生忠峯

たもとにははなれて玉をつゝまめやこれなんそれとうつせみんかし

うめ　よみ人しらず

あならめにつねなるべくもみえぬ哉こひしかるべきかは匂つゝ

かにはざくら　つらゆき

かつげども浪のなかにはさぐられて風吹ごとにうきしづむ玉

すもゝの花　ふかやぶ

今いくか春しなければうぐひすもゝのはながめて思べらなり

からもゝの花　をのゝしげはる

あふからもゝのはなをこそかなしけれわかれむ事をかねて思へば

たちばな　とものり

葦引の山たちはなれゆく雲のやどりさだめぬ世にこそ有けれ

をがたまの木　よみ人しらず

みよしのゝよしのゝたきにうかびいづるあはをかたまのきゆとみつらむ

やまがきの木　よみ人しらず

秋はきぬ今やまがきの蔓よなゝなかむ風のさむさに

あふひかつら　よみ人しらず

かくばかりあふひのまれになる人をいかゞつらしとおもはざるべき

人めゆへのちにあふ日のはるけくば我つらさにやおもひなされん

くたに　僧正へんぜう

ちりぬればのちはあくたになる花を思しらずも迷てふ哉

さうび　つらゆき

我はけさうひにぞみつる花の色をあだなる物といふべかりけり

をみなへし　とものり

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にもはにも絲をみなへし

朝露をわけそぼちつゝ花みむと今ぞの山をみなへしりぬる

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふ

いつもじを、くのかしらにをきてよめる　つらゆき

をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

きちかうのはな　とものり

あきちかうのはなりにけり白露のをける草ばも色かはりゆく

しをに　よみ人しらず

ふりはへていざ舊里の花みむとこしを匂ぞうつろひにける
りうだむのはな　とものり

我やどのはなふみちらすとりうたむのはなければやこゝにしもくる
おばな　よみ人しらず

ありと見てたのむぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてん
けにごし　やたべの名實矢田部

うちつけにこしとや花の色をみむをく白露のそむるばかりを

二条の后、春宮のみやすん所と申ける時に、めどにけづり花させりけるをよませたまひける　文室やすひで

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこの身なる時もかな
しのぶぐさ　きのとしさだ

山たかみつねにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞちりける
やまし　平あつゆき

郭公峯の雲にやまじりにしありとはきけどみるよしもなき

からはぎ　よみ人しらず

空蟬のからは木ごとにとゞむれど玉の行ゑを見ぬぞかなしき
かはなぐさ　ふかやぶ

うば玉の夢になにかはなぐさまむうつゝにだにもあかぬ心を
さがりこけ　たかむこのとしはる高向

花の色はたゞひとさかりこけれども返々ぞつゆはそめける
にがたけ　しげはる

いのちとて露をたのむにかたければ物わびしらになくのべのむし
かはたけ　かげのりのおほきみ

さ夜ふけてなかばたけゆく久かたの月吹かへせ秋の山かぜ
わらび　しんせい法し

煙たちもゆともみえぬ草のはを誰かわらびとなづけそめけん
さゝまつ びは はせをば　きのめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

なし　なつめ　くるみ　　兵衛（ひょうゑ）ふさがりとに侍ける

あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくるみをばすてぬ物から

からことゝいふ所にて、春のたちける日よめる　　安倍清行朝臣

浪のをとのけさからことにきこゆるは春のしらべやあらたまるらん

いかゞさき　　兼覽王

かぢにあたる浪のしづくを春なればいかゞさきちる花とみざらん

からさき　　あほのつねみ（阿保經覽）

かの方にいつからさきに渡けん浪ぢはあとものこらざりけり

浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらん　　伊勢

かみやがは

うば玉の我くろかみやかはるらん鏡の影にふれる白雪　　つらゆき

よどかは

葦引の山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

かたの　　たゞみね

夏草のうへはしげれるぬま水の行方のなき我心かな　　源ほどこす（忠）

かつらのみや

秋くれば月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを

百和香　　よみ人しらず

花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思

すみながし　　しげはる

春がすみながしかよひぢなかりせば秋くるかりはかへらざらまし

をき火　　みやこのよしか（都良香）

流いづるかたゞにみえぬ涙川おきひむ時やそこはしられん

ちまき　　大江千里

のちまきのをくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく

はをはじめるをはてにて、ながめをかけて、時のうた

よめ、と人のいひければよみける　　僧正聖寶

花のなかめにあくやとてわけゆけばこゝろぞともにちりぬべらなる

古今和歌集卷第十一

戀哥一

題しらず　讀人しらず

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもする哉　素性法師

をとにのみきくの白露よるはおきてひるはおもひにあへずけぬべし　紀貫之

吉野川いは浪たかく行水のはやくぞ人を思そめてし　藤原勝臣

白浪の跡なき方に行舟も風ぞたよりのしるべなりける　在原元方

をとは山をとにきゝつゝ相坂の關のこなたに年をふる哉

立歸りあはれとぞ思よそにても人に心をおきつしら波　つらゆき

世中はかくこそ有けれ吹風のめにみぬ人もこひしかりけり

右近のむまばのひをりの日、むかひにたてたりけるくるまのしたすだれより、女のかほの、ほのかに見えければ、よみてつかはしける　在原業平朝臣

みずもあらずみもせぬ人のこひしくばあやなくけふやながめくらさん

返し　よみ人しらず

しるしらぬなにかあやなくわきていはむおもひのみこそしるべなりけれ

かすがのまつりにまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家を尋てつかはせりける　みぶのたゞみね

春日野の雪まをわけておひいでくる草のはつかにみえし君はも

人の、花つみしける所にまかりて、そこなりけるひとのもとに、のちによみてつかはしける　つらゆき

山櫻霞のまよりほのかにもみてし人こそこひしかりけれ　もとかた

題しらず

たよりにもあらぬおもひのあやしきは心を人につくるなりけり　凡河内みつね

はつかりのはつかにこゑをきゝしよりなかぞらにのみ物を思哉　つらゆき

あふ事はくもゐはるかになる神のをとにきゝつゝ戀渡かな　よみ人しらず

かたいとをこなたかなたによりかけてあはずば何を玉のをにせん

夕暮は雲のはたてに物ぞ思あまつそらなる人をこふとて

かりごもの思みだれて我こふといもしるらめや人しつげずば

つれもなき人をやねたくしらつゆのおくとはなげきぬとはしのばん

ちはやぶるかもの社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし

我こひはむなしき空にみちぬらし思やれども行方もなし

するがなるたごの浦浪たゝぬ日はあれども君をこひぬ日ぞなき
ゆふつく夜さすやをかべの松のはのいつともわかぬこひもする哉
足引の山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる
吉野川いはきりとおし行水のをとにはたてじこひはしぬとも
たぎつせの中にもよどはありてふをなど我戀のふちせともなき
山たかみしたゆく水のしたにのみ流てこひむこひはしぬとも
おもひいづるときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しき物を
人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ
秋の野のおばなにまじりさく花の色にやこひむあふよしをなみ
我そのゝむめのほつえに鶯のねになきぬべきこひもする哉
葦引の山時鳥わがことや君にこひつゝいねがてにする
夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまで我身したもえをせん
戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずも成にけらしも
あはれてふ事だになくばなにをかは戀のみだれのつがねをにせん

思ふには忍る事ぞまけにける色にはいでじとおもひし物を
我戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ
あさぢふのをのゝしのはら忍とも人しるらめやいふ人なしに
人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしのなき
おもふともこふともあはむ物なれやゆふてもたゆくとくるしたひも
いで我を人なとがめそおほ舟のゆたのたゆたに物思ころぞ
伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定かねつる
いせのうみのあまのつりなはうちはへてくるしとのみやおもひ渡らん
涙川何みなかみを尋けむ物思ときの我身なりけり
たねしあればいはにも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめやも
あさな〳〵立河霧のそらにのみうきておもひのある世なりけり
わすらるゝ時しなければあしたづのおもひみだれてねをのみぞなく
唐衣ひもゆふぐれになる時は返々ぞ人はこひしき
よひ〳〵に枕さだめむ方もなしいかにねしよか夢に見えけむ

戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける
人の身もならはしものをあはずしていざ心みむこひやしぬると
しのぶればくるしき物を人しれず思てふ事たれにかたらん
こむ世にもはやなりなゝむめのまへにつれなき人を昔と思はん
つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな
行水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり
人を思心は我にあらねばや身のまよふだにしられざるらむ
おもひやるさかひはるかになりやするまよふ夢ぢにあふ人のなき
夢の内にあひみむことをたのみつゝくらせるよひはねむ方もなし
こひしねとするわざならしむば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ
涙河枕ながるゝうきねにはゆめもさだかにみえずぞ有ける
戀すれば我身はかげと成にけりさりとて人にそはぬ物ゆへ
かゞり火にあらぬ我身のなぞもかく涙の川にうきてもゆらん
篝火の影となる身のわびしきは流てしたにもゆるなりけり

はやきせにみるめおひせば我袖の涙の河にうへまし物を
おきべにもよらぬ玉藻の浪のうへにみだれてのみやこひわたりなん
あしがものさはぐ入江の白浪のしらずや人をかくこひんとは
人しれぬ思をつねにするがなるふじの山こそ我身なりけれ
とぶ鳥のこゑもきこえぬおく山の深き心を人はしらなん
あふさかのゆふつけどりも我ごとく人やこひしきねのみなくらん
相坂の關にながるゝいはし水いはで心におもひこそすれ
うき草のうへはしげれる淵なれや深き心をしる人のなき
打わびてよばゝむこゑに山びこのこたへぬ山はあらじとぞおもふ
心がへする物にもがかたこひはくるしき物と人にしらせむ
よそにしてこふればくるしいれひものおなじ心にいざむすびてん
春たてばきゆる氷のゝこりなく君が心は我にとけなん
あけたてば蟬のおりはへなきくらしよるは螢のもえこそわたれ
夏虫の身をいたづらになすこともひとつおもひによりてなりけり

ゆふさればいとゞひがたき我袖に冰の露さへをきそはりつゝ
いつとてもこひしからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり
秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘しもせむ
あきの田のほの上をてらすいなづまのひかりのまにも我やわするゝ
人めもる我かはあやな花すゝきなどかほにいでゝこひずしもあらん
あは雪のたまればがてにくだけつゝ我物おもひのしげき比哉
おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはむこひのしげきに

古今和歌集卷第十二

戀哥二

題しらず　小野小町

おもひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺ざらましを
うたゝねにこひしき人をみてしよりゆめてふ物はたのみそめてき
いとせめて戀しき時はむば玉のよるの衣をかへしてぞきる

素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるゝ夜ごとに
しもついづもでらに、人のわざしける日、眞せい法師の、だうしにていへりけることを、哥によみて、をのゝこまちがもとにつかはしける　あべのきよゆきの朝臣
つゝめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

返し　こまち

をろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつせなれば

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　藤原としゆきの朝臣

戀わびてうちぬる中に行かよふ夢のたゝぢはうつゝならなん

すみの江の岸による浪よるさへやゆめのかよひ路人めよくらむ

我こひはみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき　をのゝよしき

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまどひまされるこひもするかな　紀とものり

夕されば螢よりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき

篠のはにをく霜よりもひとりぬる我衣てぞさえまさりける

我やどの菊のかきねにをく霜のきえかへりてぞこひしかりける

川の瀨になびく玉ものみがくれて人にしられぬ戀もする哉　みぶのたゞみね

かきくらしふる白雪のしたぎえに消て物おもふ比にもあるかな　藤原おきかぜ

君こふる涙のとこにみちぬれば身をつくしとぞ我はなりける

しぬる命いきもやすると心見に玉のをばかりあはむといはなん

侘ぬればしひてわすれんとおもへども夢といふものぞ人だのめなる　よみ人しらず

わりなくもねてもさめてもこひしきか心をいづちやらば忘む

戀しきにわびて玉しひまどひなばむなしきからのなにやのこらん　つらゆき

君こふる涙しなくば唐衣むねのあたりは色もえなまし

題しらず

世とゝもに流てぞ行涙川多もこほらぬみなわなりけり

夢ぢにもつゆやをくらんよもすがらかよへるそでのひぢてかはかぬ　そせい法し

はかなくて夢にも人をみつるよは朝の床ぞおきうかりける　ふぢはらのたゞふさ

いつはりの涙なりせば唐衣しのびに袖はしぼらざらまし　大江千里

ねになきてひぢにしかども春雨にぬれにし袖ととはゞこたえよ　としゆきの朝臣

わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよたゞ鳴らむ　つらゆき

さ月山こずゑを高み時鳥なくねそらなるこひもするかな　凡河内みつね

秋ぎりのはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもほえなくに　清原ふかやぶ

虫のごとこゑにたてゝはなかねども涙のみこそしたにながるれ　よみ人しらず

これさだのみこの家の哥合のうた

秋なれば山とよむまで鳴鹿に我おとらめやひとりぬるよは　つらゆき

題しらず

あきのゝにみだれてさける花の色のちくさに物を思ころ哉　みつね

ひとりして物を思へば冨の田のいなばのそよといふ人のなき　ふかやぶ

人を思心ばかりにあらねどもくも井にのみもなきわたるかな　たゞみね

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人のこひしかるらん　つらゆき

まこもかるよどのさは水雨ふればつねよりことにまさる我戀

やまとに侍ける人につかはしける

こえぬまはよしのゝ山の櫻花人づてにのみきゝわたるかな

やよひ許に、物のたうびける人のもとに、又人まかり

つゝせうそこすときゝて、よみてつかはしける

露ならぬ心を花にをきそめて風吹ごとに物思ぞつく　坂上これのり

題しらず

我こひにくらぶの山のさくら花まなくちるともかずはまさらじ　むねをかのおほより

多川のうへはこほれる我なれやしたに流てこひわたるらん　たぐみね

たぎつせにねざしとゞめぬうき草のうきたる戀も我はするかな　とものり

よひ〳〵にぬぎて我ぬるかり衣かけておもはぬ時のまもなし

あづまぢのさやの中山中〳〵になにしか人を思そめけん

しきたへの枕のしたに海はあれど人をみるめはおひずぞ有ける

年をへてきえぬ思は有ながらよるの袂は猶こほりけり　つらゆき

我こひはしらぬ山ぢにあらなくにまよふ心ぞわびしかりける

紅のふりいでつゝなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ

白玉と見えし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり　みつね

夏むしをなにかいひけむ心から我もおもひにもえぬべらなり　たぐみね

風ふけば峯にわかるゝ白雲のたえてつねなき君が心か

月影に我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとやみん　ふかやぶ

戀しなばたがなはたゝじ世中のつねなき物といひはなすとも　つらゆき

つのくにのなにはのあしのめもはるにしげき我戀人しるらめや

手もふれで月日へにけるしらまゆみおきふしよるはいこそねられね

人しれぬおもひのみこそわびしけれ我なげきをばわれのみぞしる

ことにいでゝいはぬ許ぞみなせ河したにかよひてこひしき物を　とものり

君をのみ思ねにねし夢なればわが心から見つるなりけり　みつね

いのちにもまさりておしくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり　たゞみね

梓弓ひけばもとすゑ我かたによるこそまされ戀の心は　はるみちのつらき

我こひはゆくゑもしらずはてもなしあふをかぎりとおもふばかりぞ　みつね

われのみぞ悲しかりける ひこぼしもあはですぐせる年しなければ　ふかやぶ

今はゝやこひしなましをあひみむとたのめし事ぞ命なりける　みつね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん　とものり

命やはなにそは露のあだ物をあふにしかへばおしからなくに

古今和歌集卷第十三

戀哥三

やよひのついたちより、しのびに人に物らいひてのちに、あめのそぼふりけるに、よみてつかはしける　在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとに、よみてつかはしける　としゆきの朝臣

つれ〴〵のながめにまさる涙河そでのみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて、返しによめる　なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへ流るときかばたのまむ

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそとをくへだてつれ心は君が影となりにき

いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいざなはれつゝ
あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべき物を

この哥は、ある人のいはく、柿本人麿が哥也

なりひらの朝臣

炑のゝに篠わけしあさの袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける

小野小町

見るめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

源宗于朝臣

あはずしてこよひあけなば春の日のながくや人をつらしとおもはん

みぶのたゞみね

有明のつれなく見えし別より曉ばかりうきものはなし

ありはらのもとかた

逢事のなぎさにしよる浪なれば浦見てのみぞたちかへりける

よみ人しらず

かねてより風にさきだつ浪なれやあふ事なぎにまたき立らん

たゞみね

みちのくにありといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまだきなきなの龍田川わたらでやまむ物ならなくに

もとかた

人はいさ我はなきなのおしければ昔も今もしらずとをいはん

よみ人しらず

こりずまに又もなきなは立ぬべし人にくからぬ世にしすまへば

ひんがしの五条わたりに、人をしりをきて、まかりかよひけり、しのびなる所なりければ、かどよりしもえいらで、かきのくづれよりかよひけるを、たびかさなりければ、あるじきゝつけて、かのみちに、夜ごとに人をふせてまもらすれば、いきけれど、えあはでのみ

かへりきて、よみてやりける　　なりひらの朝臣

人しれぬ我かよひ路のせきもりはよひ〳〵ごとにうちもねななん

題しらず　　つらゆき

しのぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでゝこそくれ

こひ〳〵てまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなん　　よみ人しらず

秋のよもなのみなりけりあふといへばことぞともなくあけぬる物を　　をのゝこまち

長しともおもひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋のよなれば　　凡河内みつね

しのゝめのほがら〳〵とあけゆけばをのがきぬ〳〵なるぞかなしき　　よみ人しらず

あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬおもひそふらむ　　藤原國經朝臣

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　　としゆきの朝臣

明ぬとて歸みちにはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ

題しらず　　寵（一説ウツヲ 一説チヨウ用之）

しのゝめの別をおしみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる　　よみ人しらず

郭公夢かうつゝかあさつゆのおきて別しあかつきのこゑ

玉匣あけば君がなたちぬべみ夜深くこしを人見けむかも　　大江千里

けさはしもおきけむ方もしらざりつ思いづるぞきえてかなしき　　なりひらの朝臣

人にあひて、あしたによみてつかはしける

ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉

業平朝臣の、伊勢のくにゝまかりたりける時、齋宮なりける人に、いとみそかにあひて、又のあしたに、人やるすべなくて、おもひをりけるあひだに、女のもと

よりをこせたりける　よみ人しらず

君やこし我や行けむおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

返し　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとはよひとさだめよ

題しらず　よみ人しらず

むば玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

さよふけてあまのとわたる月影にあかずも君をあひみつるかな

君が名も我なもたてじなにはなるみつともいふなあひきともいはじ

名とり川せゞのむもれ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけん

吉野川水の心ははやくともたきのをとにはたてじとぞおもふ

こひしくばしたにをおもへ紫のねずりの衣色にいづなゆめ

花すゝきほにいでゝこひばなをおしみしたゆふひものむすぼゝれつゝ　をのゝはるかぜ

たちばなのきよきが、しのびにあひしれりける女のもとより、をこせたりける　よみ人しらず

おもふどちひとりゞがこひしなば誰によそへて藤衣きむ　橘のきよき

なきこふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてらよるこそはきめ　こまち

題しらず

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくとみるがわびしき

限なきおもひのまゝによるもこむゆめぢをさへに人はとがめじ

夢ぢにはあしもやすめずかよへどもうつゝにひとめ見しことはあらず　よみ人しらず

おもへども人めづゝみの高ければ河とみながらえこそわたらね

たぎつせの早き心をなにしかも人めづゝみのせきとゞむらん　きのとものり

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

紅の色にはいでじかくれぬのしたにかよひてこひはしぬとも　みつね

題しらず

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらずな

篠のはにをくはつしもの夜をさむみしみはつくとも色にいでめやは

よみ人しらず

山しなのをとはの山のをとにだに人のしるべく我戀めかも

この哥、ある人、あふみのうねめのとなむ申す

きよはらのふかやぶ

みつ塩のながれひるまをあひがたみ見るめのうらによるをこそまて

平定文

白河のしらずともいはじ底きよみ流てよゝにすまむとおもへば

とものり

したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人なとがめそ

我こひをしのびかねてはあし引の山橘の色にいでぬべし

よみ人しらず

おほかたは我なもみなとこぎいでなむ世をうみべだにみるめすくなし

枕より又しる人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

平定文

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

よみ人しらず

この哥は、ある人のいはく、柿本人麿がなり

池にすむなをゝしどりの水を淺みかくるとすれどあらはれにけり

あふことは玉のをばかりなのたつはよしのゝ河のたぎつせのごと

むら鳥のたちにしわがな今更に事なしぶともしるしあらめや

君により我なは花に春霞野にも山にもたちみちにけり

伊勢

しるといへば枕だにせでねし物をちりならぬなの空にたつらむ

古今和歌集卷第十四

戀哥四

題しらず　　讀人しらず

みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人にこひやわたらん

あひみずばこひしき事もなからましをとにぞ人をきくべかりける　つらゆき

いその神ふるのなか道中〳〵にみずばこひしとおもはましやは　ふぢはらのたゞゆき

君といへば見まれみずまれふじのねのめづらしげなくもゆる我戀　伊勢

夢にだに見ゆとは見えじあさな〳〵我おもかげにはづる身なれば　よみ人しらず

いしま行水の白浪たちかへりかくこそは見めあかずもあるかな
伊勢のあまのあさなゆふなにかづくてふみるめに人をあくよしもがな
とものり

春霞たなびく山の櫻花みれどもあかぬ君にも有かな
ふかやぶ

心をぞわりなき物と思ぬる見るものからやこひしかるべき
凡河内みつね

かれはてむ後をばしらで夏草の深くも人のおもほゆるかな
よみ人しらず

あすか河ふちは瀬になる世なりともおもひそめてむ人はわすれじ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

思てふ事のはのみや秋をへて色もかはらぬものには有らん

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらんうぢのはし姫

又は、うぢの玉ひめ

君やこむ我やゆかむのいざよひに槇のいた戸もさゝずねにけり
そせい法し

今こむといひしばかりに長月のあり明の月をまちいでつるかな
よみ人しらず

月夜よしよゝしと人につげやらばこてふにゝたりまたずしもあらず
君こずばねやへもいらじこ紫わがもとゆひに霜はをくとも
宮城のゝもとあらの小萩露をゝもみ風をまつごと君をこそまて
あなこひし今もみてしが山がつのかきほにさけるやまとなでしこ
つのくにのなにはおもはず山しろのとはにあひみんことをのみこそ
つらゆき

しきしまのやまとにはあらぬ唐衣ころもへずして逢よしもがな
ふかやぶ

戀しとはたがなづけゝむ事ならんしぬとぞたゞにいふべかりける

みよしのゝおほ河のべの藤浪のなみにおもはゞ我こひめやは　よみ人しらず

かくこひむ物とは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける

天の原ふみとゞろかしなる神もおもふ中をばさくる物かは

梓弓ひきのゝつゞらすゑつゐにわがおもふ人に事のしげゝん

この哥は、ある人、あめのみかどの、あふみのうねめにたまひける、となむ申す

夏びきのてびきのいとをくり返しことしげくともたゝむとおもふな

この哥は、返しによみてたてまつりける、となん

さと人のことはなつのゝしげくともかれゆく君にあはざらめやは

藤原敏行朝臣の、なりひらの朝臣の家なりける女をあひしりて、ふみつかはせりけることばに、いまゝうでく、あめのふりけるをなむ、見わつらひ侍、といへりけるをきゝて、かの女にかはりてよめりける　在原なりひらの朝臣

かすゞにおもひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

ある女の、なりひらの朝臣を、所さだめずありきす、とおもひて、よみてつかはしける　よみ人しらず

おほぬさのひくてあまたになりぬればおもへどえこそたのまざりけれ

返し　なりひらの朝臣

おほぬさとなにこそたてれ流てもつゐによるせはありてふ物を

題しらず　よみ人しらず

すまのあまの塩やく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし

たが里によがれをしてか時鳥たゞこゝにしもねたるこゑする

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

僞と思物からいま更にたがまことをか我はたのまむ　素性法師

秋風に山の木のはのうつろへば人のこゝろもいかゞとぞおもふ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　とものり

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

題しらず　よみ人しらず

空蟬の世の人ごとのしげゝれば忘ぬものゝかれぬべらなり

あかでこそ思はむ中ははなれなめそをだに後の忘がたみに

忘なむと思心のつくからに有しよりけにまづぞこひしき

わすれなん我をうらむな郭公人の秋にはあはむともせず

たえず行あすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

この哥、ある人のいはく、なかとみのあづま人が哥也

よど河のよどむと人はみるらめど流て深き心あるものを　そせい法し

そこひなきふちやはさはぐ山川の淺きせにこそあだ浪はたて　よみ人しらず

紅のはつ花ぞめの色深くおもひし心われわすれめや　河原左大臣

みちのくのしのぶもぢすり誰ゆへにみだれむと思我ならなくに　よみ人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

ちゞの色にうつろふらめどしらなくに心し秋のもみぢならねば　小野小町

あまのすむさとのしるべにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ

くもり日の影としなれる我なれはめにこそみえね身をばはなれず　しもづけのをむね

色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもほえなくに　つらゆき

めづらしき人をみむとやしかもせぬ我したひものとけわたるらん　よみ人しらず

かげろふのそれかあらぬかはるさめのふるひとなればゝ袖ぞぬれぬる
ほり江こぐたなゝしを舟こぎかへりおなじ人にや戀わたりなん

伊勢

わたつみとあれにしとこをいまさらにはらはゞ袖やあわとうきなむ

つらゆき

いにしへに猶立歸るこゝろかなこひしきごとに物わすれせで

人を、しのびにあひしりて、あひがたくありければ、その家のあたりをまかりありきけるおりに、かりのなくをきゝて、よみてつかはしける

大伴くろぬし

思いでゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや

右のおほいまうちぎみ、すまずなりにければ、かのむかしをこせたりけるふみどもを、とりあつめて返すとて、よみてをくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこしことのは今は返してむ我身ふるればをき所なし

今はとて返すことのはひろひをきてをのが物からかたみとやみん

近院の右のおほいまうちぎみ

題しらず

玉桙の道は常にもまとはなん人を問とも我かとおもはむ

よるかの朝臣

まてといはゞねてもゆかなんしひてゆくこまのあしおれまへのたなばし

よみ人しらず

中納言源のゝぼるの朝臣の、あふみのすけに侍ける時、よみてやれりける

閑院昇延喜八年中納言九年民部卿十四年大納言

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなく〳〵もみめ

題しらず

伊勢

故郷にあらぬ物から我ために人の心のあれて見ゆらむ

寵

山がつのかきほにはへるあをつゞら人はくれどもことづてもなし

さかゐの人ざね酒井人眞

おほぞらはこひしき人のかたみかは物思ごとにながめらるらむ　よみ人知らず

あふまでのかたみも我はなにせんにみても心のなぐさまなくに

おやのまもりける人のむすめに、いとしのびてあひて、物らいひけるあひだに、おやのよぶ、といひければ、いそぎてかへるとて、もをなむぬぎをきていりにける、

その〻ち、もを返すとてよめる　おきかぜ

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり

題しらず　よみ人しらず

かたみこそ今はあだなれこれなくばわする〻時もあらまし物を

古今和歌集卷第十五

戀哥五

五条のきさいの宮のにしのたいに、すみける人に、ほいにはあらで、物いひわたりけるを、む月の十日あまりになむ、ほかへかくれにける、あり所はき〻けれど、え物もいはで、又のとしの春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、こぞをこひて、かのにしのたいにいきて、月のかたぶくまで、あはらなるいたじきにふせりてよめる　在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

題しらず　藤原なかひらの朝臣（仲平　枇杷左大臣）

花す〻き我こそしたにおもひしかほにいで〻人にむすばれにけり

よそにのみきかまし物を音羽川わたるとなしに見なれそめけん　藤原かねすけの朝臣

わがごとく我をおもはむ人もがなさてもやうきと世を心みむ　凡河内躬恒

久かたのあまつそらにもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる　もとかた

みても又またも見まくのほしければなるゝを人はいとふべらなり　よみ人しらず

雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみよをばへぬらん　きのとものり

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらん數ならぬ身は　よみ人しらず

うきめのみおひてながるる浦なればかりにのみこそあまはよるらめ　伊勢

あひにあひて物思ころの我袖にやどる月さへぬるゝがほなる　よみ人しらず

秋ならでをく白露はね覺する我手枕のしづくなりけり

すまのあまのしほやき衣おさをあらみまどをにあれや君がきまさぬ

山しろのよどの若ごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なにゝふかめておもひそめけん

曉のしぎのはねがきもゝはがき君がこぬよはわれぞかずかく

玉かづら今はたゆとや吹風のをとにも人のきこえざるらむ

我袖にまだき時雨のふりぬるは君がこゝろに秋やきぬらん

山の井の淺き心もおもはぬを影ばかりのみ人の見ゆらむ

忘草たねとらましをあふことのいとかくかたき物としりせば

こふれどもあふよのなきは忘草ゆめぢにさへやおひしげるらん

夢にだにあふことかたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝ　けむけい法し

もろこしも夢にみしかば近かりきおもはぬ中ぞはるけかりける

さだのゝぼる貞朝臣参備中守仁明御子

獨のみながめふるやのつまなれば人を忍の草ぞおひける

僧正へんぜう

我やどは道もなきまで荒にけりつれなき人をまつとせしまに

今こむといひて別し朝よりおもひくらしのねをのみぞなく

よみ人しらず

こめやとは思物からひぐらしのなくゆふぐれはたちまたれつゝ

いましはとわびにし物をさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

今はこじと思物から忘つゝまたるゝ事のまたもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

うへていにし秋田かるまで見えこねばけさはつかりのねにぞ鳴ぬる

こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらん

ひさしくも成にけるかなすみの江の松はくるしき物にぞ有ける

住の江の松ほどひさに成ぬればあしたづのねになかぬ日はなし

かねみのおほきみ

なかひらの朝臣あひしりて侍けるを、かれ方になりにければ、ちゝが、やまとのかみに侍けるもとへまかるとて、よみてつかはしける

伊勢

みわの山いかにまちみむ年ふとも尋る人もあらじとおもへば

題しらず　雲林院のみこ常康親王仁明御子

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりも行か人の心の

をのゝこまち

今はとて我身時雨にふりぬればことのはさへにうつろひにけり

返し　小野さだき貞樹

人をおもふ心このはにあらばこそ風のまに〳〵ちりもみだれめ

なりひらの朝臣、きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありて、しばしのあひだ、ひるはきて、

ゆふさりはかへりのみしければ、よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなり行かさすがにめにはみゆる物から　なりひらの朝臣

返し

行かへりそらにのみしてふることは我ゐる山の風はやみなり　かげのりのおほきみ

題しらず

から衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひむとおもひし　とものり

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん　源宗于朝臣

つれもなくなり行人のことのはぞ炑よりさきの紅葉なりける

こゝちそこなへりけるころ、あひしりて侍ける人のとはで、心ちをこたりてのち、とぶらへりければ、よみてつかはしける

しでの山ふもとをみてぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて　兵衛藤原高經朝臣母

あひしれりける人の、やうやくかれがたになりけるあひだに、やけたるちのはに、ふみをさしてつかはせりける

時すぎてかれゆくをのゝあさぢには今は思ぞたえずもえける　こまちがあね

物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに、野火のもえけるをみてよめる　伊勢

多枯ののべとわが身をおもひせばもえても春をまたまし物を　とものり

題しらず

水のあはのきえてうき身といひながら流て猶もたのまるゝかな　よみ人しらず

みなせ川ありて行水なくばこそつゐに我身をたえぬとおもはめ　みつね

よしの河よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれじ　よみ人しらず

世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有ける
心こそうたてにくけれそめざらばうつろふ事もおしからましや
　　こまち
色みえでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有ける
　　よみ人しらず
我のみやよを鶯となきわびむ人の心の花とちりなば
　　そせい法し
おもふともかれなむ人をいかゞせむあかずちりぬる花とこそみめ
　　よみ人しらず
今はとて君がゝれなばわが宿の花をばひとりみてやしのばん
　　むねゆきの朝臣
忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜はをかなむ
寛平御時、御屏風にうたかゝせたまひける時、よみて
かきける
　　そせい法し

忘草なにをかたねとおもひしはつれなき人の心なりけり
題しらず
秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらん
　　きのつらゆき
はつかりのなきこそ渡れ世中の人の心の秋もうければ
　　よみ人しらず
あはれともうしとも物を思時などか涙のいとなかるらむ
身をうしとおもふにきえぬ物なればかくてもへぬる世にこそ有けれ
　　典侍藤原直子朝臣（なほいこ）
あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ
　　いなばもとよのおほきみの女
あひみぬもうきも我身のから衣おもひしらずもとくるひも哉
寛平御時、きさいの宮の哥合のうた
　　すがのゝたゞをむ忠臣
つれなきを今はこひじと思へども心よはくもおつる涙か

題しらず　　伊勢

人しれずたえなましかば侘つゝもなきなぞとだにいはまし物を　　よみ人しらず

それをだにおもふ事とてわがやどを見きとないひそ人のきかくに

あふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

侘はつる時さへ物のかなしきはいづこをしのぶなみだなるらん　　藤原おきかぜ

怨てもなきてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして　　よみ人しらず

夕されば人なき床をうちはらひなげかむためとなれる我身か

わたつみの我身こす浪立歸あまのすむてふうらみつるかな

あらを田をあらすき返し〳〵ても人の心をみてこそやまめ

ありそうみのはまのまさごとたのめしは忘ることのかずにぞありける

あしべより雲ゐをさして行かりのいや遠ざかる我身かなしも

しぐれつゝもみづるよりもことのはの心の疎にあふぞわびしき

秋風のふきと吹ぬるむさし野はなべて草ばの色かはりけり　　小町

秋風にあふたのみこそ悲けれわが身むなしく成ぬとおもへば　　平さだぶん

あき風の吹うらかへすくずのはのうらみても猶うらめしき哉　　よみ人しらず

秋といへばよそにぞきゝしあだ人の我をふるせるなにこそ有けれ

わすらるゝ身をうぢはしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人もかよはず　　坂上これのり

あふことをながらのはしのながらへて戀わたるまに年ぞへにける　　とものり

うきながらけぬるあわともなりなゝむ流てとだにたのまれぬ身は

流てはいもせの山の中におつるよしのゝ河のよしや世中　よみ人しらず

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりにける時よめる　小野たかむらの朝臣

なく涙雨とふらなん渡川水まさりなばかへりくるがに

忠仁公

さきのおほきおほいまうちぎみを、白河のあたりにを

くりける夜よめる　延喜之比太政大臣只二人仍雖不辭官前卜書前後之由也

ちの涙おちてぞたぎつ白河は君がよまでの名にこそ有けれ

昭宣公寛平三年正月薨五十六

ほりかはのおほきおほいまうちぎみ、身まかり　太政大臣關白始

にける時に、ふかくさの山におさめける後によみける　僧都勝延

空蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて

かむつけのみねを峯雄

深草のゝべの櫻し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ

藤原敏行朝臣の、身まかりにける時に、よみてかの家につかはしける　きのとものり

ねてもみゆねでもみえけりおほかたはうつせみの世ぞ夢には有ける

あひしれりける人の、身まかりにければよめる　きのつらゆき

夢とこそいふべかりけれ世中にうつゝある物と思けるかな

あひしれりける人の、身まかりにける時によめる　みぶのたゞみね

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなきよをもうつゝとはみず

あねの、身まかりにける時によめる

せをせけばふちとなりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき

藤原のたゞふさが、むかしあひしりて侍ける人の、身まかりにける時に、とぶらひにつかはすとてよめる　閑院

さきだゝぬくゐのやちたびかなしきはながるゝ水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりにける時、よめる　つらゆき

あすしらぬ我身とおもへどくれぬまのけふは人こそ悲かりけれ

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるをみるだに戀しきものを　たゞみね

はゝがおもひにてよめる　凡河内みつね

神無月時雨にぬるゝもみちばゝたゞわび人のたもとなりけり

ちゝがおもひにてよめる　たゞみね

藤衣はつるゝいとは侘人の涙の玉のをとぞなりける

おもひに侍ける年の秋、山でらへまかりけるみちにて　つらゆき

よめる

朝露のおくての山田かりそめにうき世中を思ぬる哉

おもひに侍ける人を、とぶらひにまかりてよめる　たゞみね

すみ染の君が袂は雲なれやたえず涙の雨とのみふる

女のおやのおもひにて、山でらに侍けるを、ある人の

とぶらひつかはせりければ、返事によめる　よみ人しらず

葦引の山べに今はすみ染の衣の袖はひる時もなし

諒闇のとし、池のほとりの花をみてよめる　たかむらの朝臣

水のおもにしづく花の色さやかにも君がみ影のおもほゆるかな

深草のみかどの御國忌の日、よめる　文室やすひで

草深き霞の谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

ふかくさのみかどの御時に、藏人頭にて、よるひるなれつかうまつりけるを、諒闇になりにければ、さらに世にもまじらずして、ひえの山にのぼりて、かしらおろしてけり、その又のとし、みな人、御ぶくぬぎて、あるはかうぶりたまはりなどよろこびけるをきゝてよめる　僧正遍昭 藏人頭右近少將良峯宗貞

みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかはきだにせよ

河原のおほいまうちぎみの、身まかりての秋、かの家のほとりをまかりけるに、もみぢのいろ、まだふかくもならざりけるを見て、かの家によみていれたりける

うちつけにさびしくもあるかもみちばもぬしなき宿は色なかりけり

藤原高經朝臣の、身まかりての又のとしの夏、郭公のなきけるをきゝてよめる　近院右のおほいまうちぎみ 龍有文德源氏子時大納言左大將民部卿三太子傳

郭公けさなくこゑにおどろけば君をわかれし時にぞ有ける

櫻をうへてありけるに、やうやく花さきぬべき時に、かのうへける人身まかりにければ、その花をみてよめる　つらゆき

花よりも人こそあだに成にけれいづれをさきにこひんとかみし　きのもちゆき 茂行

あるじ身まかりにける人の家の、梅の花をみてよめる　つらゆき

色もかも昔のこさに匂へどもうへけむ人の影ぞこひしき

河原の左のおほいまうちぎみの、身まかりてのゝち、かの家にまかりてありけるに、しほがまといふ所のさまを、つくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまの浦さびしくもみえわたる哉

藤原のとしもとの朝臣の、右近中將にてすみ侍けるざうしの、身まかりてのち、人もすまずなりにけるに、秋の夜ふけて、ものよりまうできけるついでに見いれければ、もとありしせんざいも、いとしげくあれたりけるを見て、はやくそこに侍ければ、むかしを思やりてよみける

みはるのありすけ

君がうへし一むら薄むしのねのしげきのべとも成にけるかな

これたかのみこの、ちゝの侍けむ時によめりけむうたども、とこひければ、かきてをくりけるおくに、よみてかけりける

とものり

ことならばことのはさへもきえなゝむみれば涙のたぎまさりけり

題しらず

よみ人しらず

なき人のやどにかよはゞ郭公かけてねにのみなくとつげなん

誰みよと花さけるらむ白雲のたつのとはやくなりにし物を

式部卿のみこ、閑院の五のみこにすみわたりけるを、いくばくもあらで、女みこの身まかりにける時に、かのみこすみける帳のかたびらのひもに、ふみをゆひつけたりけるを、とりてみれば、むかしの手にて、このうたをなむ、かきつけたりける

かすゞに我を忘ぬ物ならば山の霞をあはれとは見よ

おとこの、人のくにゝまかれりけるまに、女にはかにやまひをして、いとよはくなりにける時、よみをきて身まかりにける

よみ人しらず

こゑをだにきかでわかるゝ玉よりもなきとこにねん君ぞかなしき

やまひにわづらひ侍ける秋、こゝちのたのもしげなくおぼえければ、よみて、人のもとにつかはしける

大江千里

もみち葉を風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけり

身まかりなむとてよめる　藤原これもと

露をなどあだなる物とおもひけんわが身も草にをかぬばかりを

やまひして、よはくなりにける時よめる　なりひらの朝臣

つゐに行道とはかねてきゝしかど昨日けふとはおもはざりしを

かひのくにゝ、あひしりて侍ける人とぶらはむとて、まかりけるを、みち中にて、にはかにやまひをして、いま〳〵となりにければ、よみて、京にもてまかりて、母にみせよといひて、人につけ侍けるうた　在原しげはる

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限のかどでなりけり

古今和歌集卷第十七

雜哥上

題しらず　讀人しらず

我うへに露ぞをくなる天河とわたる船のかいのしづくか

おもふどちまとゐせる夜は唐錦たゝまくおしき物にぞ有ける

うれしきを何かつゝまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを

限なき君が爲にと折花はときしもわかぬ物にぞ有ける

ある人のいはく、この哥は、さきのおほいまうちぎみの也

紫のひともとゆへにむさしのゝ草はみながらあはれとぞみる

めのおとうとをもて侍ける人に、うへのきぬををくるとて、よみてやりける　なりひらの朝臣

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

大納言ふぢはらのくにつねの朝臣の、宰相より中納言（寛平六年五月五日中納言　四位三位）になりける時に、そめぬうへのきぬのあやをゝくると　近院右のおほいまうちぎみ（于時大納言左大將）てよめる

色なしと人やみるらむ昔より深き心にそめてし物を

いそのかみのなむまつが、宮づかへもせで、いそのかみといふ所にこもり侍けるを、にはかに、かうぶりたまはれりければ、よろこびいひつかはすとて、よみて つかはしける

日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにし里に花もさきけり

二条のきさきの、まだ東宮のみやすん所と申しける時（寛平元年正月即位日爲中宮　六年正月爲皇太后宮）に、大原野にまうで給ける日よめる　春宮母儀女御也　なりひらの朝臣

おほはらやをしほの山もけふこそは神世のこともおもひいづらめ

五節のまひゝめをみてよめる　よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢ吹とぢよをとめのすがたしばしとゞめむ

五節のあした、かむざしのたまのおちたりけるを見て、たがならむと、とぶらひてよめる　河原左のおほいまうちぎみ

ぬしやたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

寛平御時に、うへのさぶらひに侍けるをのこども、かめをもたせて、きさいの宮の御方に、おほみきのおろし、ときこえにたてまつりたりけるを、くら人どもわらひて、かめをおまへにもていでし、ともかくもいはずなりにければ、つかひのかへりきて、さなむありつると いひければ、くら人のなかにをくりける　としゆきの朝臣

玉だれのこがめやいづらこよろぎのいその浪わけおきにいでにけり

女どもの、みてわらひければよめる　けむけいほうし

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなん

方たがへに、人の家にまかれりける時に、あるじのきぬをきせたりけるを、あしたにかへすとてよめる　きのとものり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつりかこくも匂ぬるかな

題しらず　よみ人しらず

をそくいづる月にもある哉葦引の山のあなたもをしむべらなり

わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて　なりひらの朝臣

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるに

よめる　きのつらゆき

かつみれどうとくもあるかな月影のいたらぬさともあらじとおもへば

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物とおもひしをみなぞこに山のはならでいづる月かげ　よみ人しらず

題しらず

あまの河雲のみおにてはやければひかりとゞめず月ぞながるゝ

あかずして月のかくるゝ山本はあなたおもてぞこひしかりける

これたかのみこの、かりしけるともにまかりて、やどりにかへりて、夜ひとよさけをのみ、物がたりをしけるに、十一日の月もかくれなむ、としけるおりに、みこゑひて、うちへいりなむとしければ、よみ侍ける　なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん

慧子代始齋院天安元年二月廢之其事祕世莫知云々若九是又有此事歟遂被廢元慶五年正月六日薨以述子爲齋院毋同惟喬二年自退

たむらのみかどの御時に、齋院に侍けるあきらけいこ慧子毋藤朔子從五位上是雄女のみこを、はゝあやまちありといひて、齋院をかへられむとしけるを、その事やみにければよめる　あま敬信よるかの朝臣母

おほぞらをてり行月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに

題しらず　よみ人しらず

いそのかみふるからをゝのもとがしは本の心はわすられなくに

いにしへの野中のし水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ

いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありし物也

今こそあれ我も昔はおとこ山さか行時もありこしものを
世中にふりぬる物はつのくにのながらのはしと我となりけり
さゝのはにふりつむ雪のうれをゝもみ本くだち行我さかりかも
おほあらきのもりのした草おいぬればこまもすさめずかる人もなし

又は、さくらあさのをふのしたぐさおいぬれば

かぞふればとまらぬ物をとしといひてことしはいたくおいぞしにける
おしてるやなにはのみつにやく塩のからくも我はおいにけるかな

又は、おほともものみつのはまべに

おいらくのこむとしりせばかどさしてなしとこたへてあはざらましを

この三つの哥は、むかし有けるみたりのおきなのよめるとなむ

さかさまに年もゆかなんとりもあへずすぐるよはひやともにかへると
とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうとすぐしつる哉
とゞめあへずむべも年とはいはれけりしかもつれなくすぐるよはひか
鏡山いざたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老やしぬると

この哥は、ある人のいはく、大伴のくろぬしが也

業平朝臣（伊登内親王恒武皇女貞観三年九月薨）のはゝのみこ、長をかにすみ侍ける時に、なりひら、宮づかへすとて、時〳〵もえまかりとぶらはず侍ければ、しはす許に、はゝのみこの許より、とみのこととて、ふみをもてまうできたり、あけてみれば、ことばゝなくて、ありけるうた

老ぬればさらぬ別も有といへばいよ〳〵見まくほしき君哉

業平朝臣

返し

世中にさらぬわかれのなくもがなちよもとなげく人のこのため

在原むねやな

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた

白雪のやへふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな

おなじ御時の、うへのさぶらひにて、をのこどもに、おほみきたまひて、おほみあそびありけるついでに、つかうまつれる

としゆきの朝臣

老ぬとてなどかわが身をせめきけんおいずばけふにあはまし物か

題しらず　　よみ人しらず

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思年のへぬれば

我見てもひさしく成ぬすみの江の岸の姫松いくよへぬらん

住吉の岸のひめ松人ならばいくよかへしととはまし物を

梓弓いそべの小松たが世にかよろづよかねてたねをまきけん

この哥は、ある人のいはく、柿本の人まろが也

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のおのへにたてる松ならなくに

藤原おきかぜ

誰をかも知人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

よみ人しらず

わたつ海のおきつしほあひにうかぶあわのきえぬ物からよる方もなし

わたつうみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路嶋やま

わだの原よせくる波のしば〳〵も見まくのほしき玉津嶋かも

なにはがたしほみちくらしあま衣たみのゝしまにたづなきわたる

貫之がいづみのくにゝ侍ける時に、やまとよりこえまうできて、よみてつかはしける　　藤原たゞふさ

君を思ひおきつの濱になくたづの尋くればぞ有とだにきく

返し　　つらゆき

おきつ浪たかしのはまの濱松のなにこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

なにはがたおふる玉もをかりそめのあまとぞ我はなりぬべらなる

あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける　　みぶのたゞみね

住吉とあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時、たみのゝしまにて、雨にあひてよめる　　つらゆき

雨によりたみのゝしまをけふゆけどなにはかくれぬ物にぞ有ける

一本にきたれども

法皇、にし河におはしましたりける日、つるすにたてり、といふことを題にて、よませたまひける

あしたづのたてる河邊を吹風によせてかへらぬ浪かとぞ見る　伊勢

中務のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめてあそびける日、法皇御覽じにおはしましたりけり、ゆふさりつかた、かへりおはしまさむとしけるおりに、よみてたてまつりける

水の上にうかべる船の君ならばこゝぞとまりといはまし物を　眞せい法し

からことゝいふ所にてよめる

宮こまでひゞきかよへるからことは浪のをすげて風ぞひきける　在原行平朝臣

ぬのびきのたきにてよめる

こきちらすたきの白玉ひろひをきてよのうき時の涙にぞかる　なりひらの朝臣

布引のたきのもとにて、人々あつまりて、哥よみける時によめる

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに　承均法師

よしのゝたきを見てよめる

たがためにひきてさらせる布なれやよをへてみれどとる人もなき　神たい法師

題しらず

きよたきのせゞの白絲くりためて山わけ衣をりてきましを　伊勢

龍門にまうでゝ、たきのもとにてよめる

たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山姫の布さらすらん　朱雀院のみかど、ぬのびきのたき御覽ぜんとて、ふん

月のなぬかの日、おはしましてありける時に、さぶらふ人々に、うたよませ給けるによめる　たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布をたなばたに我心とやけふはかさまし　たゞみね

ひえの山なるをとはのたきを見てよめる

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもりおいにけらしなくろきすぢなし　みつね

おなじたきをよめる

風ふけど所もさらぬ白雲はよをへておつる水にぞ有ける

田むらの御時に、女ばうのさぶらひにて、御屏風のゑ

御覽じけるに、たきおちたりけるところおもしろし、

これを題にて哥よめ、とさぶらふ人におほせられけれ

ば　三条の町惟高親王母

思せく心の内のたきなれやおつとはみれどをとのきこえぬ

屏風のゑなる花をよめる　つらゆき

さきそめし時より後はうちはへて世は春なれやいろのつねなる

屏風のゑによみあはせてかきける　さかのうへのこれのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなをこそわたれ秋のうければ

古今和歌集卷第十八

雜哥下

題しらず　讀人しらず

世中はなにかつねなるあすか河昨日のふちぞけふはせになる

いく世しもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思みだるゝ

鴈のくる峯の朝露はれずのみおもひつきせぬ世中のうさ　小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくにことしあればまづなげかれぬあなう世の中

かひのかみに侍ける時、京へまかりのぼりける人につかはしける　をゝのさだき

宮こ人いかゞとゝはゞ山高みはれぬくもゐにわぶとこたへよ

文室のやすひで、みかはのぞうになりて、あがた見に

はえいでたゝじや、といひやれりける返事に、よめる　小野小町

わびぬればよをうき草のねをたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらず

あはれてふことこそうたて世中をおもひはなれぬほだしなりけれ　よみ人しらず

あはれてふことの葉ごとにをくつゆは昔をこふる涙なりけり

世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物は涙なりけり

世中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ

よのなかにいづら我身の有てなしあはれとやいはむあならとやいはん

山里は物のわびしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり　これたかのみこ

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめばすみぬるよにこそ有けれ　ふるのいまみち

しりにけむきゝてもいとへ世中は浪のさはぎに風ぞしくめる

いづくにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ　そせい

世中はむかしよりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか　よみ人しらず

よのなかをいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出にけん

みよしのゝ山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ

世にふればうさこそまされみよしのゝいほのかげ道ふみならしてん

いかならむ巖の中にすまばかは世のうき事のきこえこざらん

葦引の山のまに〳〵かくれなんうき世中はあるかひもなし

世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれるゆきやけなまし　ものゝへのよしな

おなじもじなきうた

よのうきめみえぬやまぢへいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ　凡河内みつね

山のほうしのもとへつかはしける

世をすてゝ山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらん

物思ける時、いときなきこをみてよめる

今更に何おひいつらん竹のこのうきふしゝげきよとはしらずや

よみ人しらず

題しらず

世にふればことのはしげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬべらなり

ある人のいはく、たかつのみこの哥也 高津内親王

我身からうき世中となづけつゝ人のためさへかなしかるらむ

おきのくにゝながされ侍ける時によめる　たかむらの朝臣

思きやひなの別におとろへてあまのなはたぎいさりせんとは

田むらの御時に、事にあたりて、つのくにのすまといふ所にこもり侍けるに、宮の内に侍ける人につかはしける

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

左近將監とけて侍ける時に、女のとぶらひにをこせたりける返事に、よみてつかはしける

をのゝはるかぜ 寛平二年記 右少將

あまびこのをとつれしとぞ今はおもふわれか人かと身をたどる世に

つかさとけて侍ける時よめる　平定文

うき世には門させりとも見えなくになどか我身のいでがてにする

ありはてぬ命まつまのほどばかりうきことしげくおもはずもかな

みこの宮のたちはきに侍けるを、宮づかへつかうまつらずとて、とけて侍ける時によめる　みやぢのきよき 清樹

つくばねの木のもとごとにたちぞよる春のみ山の影をこひつゝ

時なりける人の、にはかに時なくなりて、なげくをみて、みづからの、歎もなく、よろこびもなきことを思ひてよめる　清原深養父

ひかりなき谷には春もよそなればさきてとくちる物思もなし

かつらに侍ける時に、七条の中宮のとはせたまへりける御返事に、たてまつれりける　伊勢

久方の中におひたる里なればひかりをのみぞたのむべらなる

きのとしさだが、阿波のすけにまかりける時に、むまのはなむけせむとて、けふといひをくれりける時に、こゝかしこにまかりありきて、夜ふくるまでみえざりければ、つかはしける　なりひらの朝臣

今ぞしるくるしき物と人またむ里をばかれず問べかりける

これたかのみこのもとに、まかりかよひけるを、かしらおろして、をのといふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとてまかりたりけるに、ひえの山のふもとなりければ、雪いとふかゝりけり、しゐて、かのむろにまかりいたりておがみけるに、つれ〴〵として、いと物がなしくて、かへりまうできてよみてをくりける

忘ては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは

深草のさとにすみ侍て、京へまうでくとて、そこなりける人によみてをくりける　よみ人しらず

年をへてすみこし里をいでゝいなばいとゞ深草のとや成なん

返し

野とならばうづらとなきて年はへんかりにだにやは君はこざらん

題しらず

我を君なにはの浦に有しかばうきめをみつのあまとなりにき

この哥は、ある人、むかし、おとこありけるをうなの、おとことはずなりにければ、なにはなるみつのてらにまかりて、あまになりて、よみて、おとこにつかはせりける、となんいへる

返し

なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはなる

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらして門させりてへ

ともだちの、ひさしうまうでこざりけるもとに、よみてつかはしける　みつね

水のおもにおふるさ月のうき草のうきことあれやねをたえてこぬ

人をとはで、ひさしうありけるおりに、あひうらみけれぼよめる

身をすてゝゆきやしにけん思よりほかなる物は心なりけり

むねをかのおほより、こしよりまうできたりける時に、雪のふりけるをみて、をのが思は、この雪のごとくなむつもれる、といひけるおりによめる

君がおもひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあらじとおもへば

宗岳大頼

返し

君をのみおもひこし路の白山はいつかは雪のきゆる時ある

きのつらゆき

こしなりける人に、つかはしける

おもひやるこしのしら山しらねどもひとよも夢にこえぬよぞなき

よみ人しらず

題しらず

いざこゝに我世はへなむすがはらや伏見の里のあれまくもおし

わがいほはみわの山本こひしくばとぶらひきませ杉たてる門

きせん法師

我庵は都のたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり

よみ人しらず

あれにけりあはれいくよの宿なれやすみけむ人のをとづれもせぬ

ならへまかりける時に、あれたる家に、女の琴ひきけるをきゝて、よみていれたりける

よしみねのむねさだ

わび人のすむべきやどゝみるなべになげきくはゝることのねぞする

はつせにまうづるみちに、ならの京にやどれりける時よめる

二条（惟いたゞの朝臣女）

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうきなゝりけり

題しらず

よみ人しらず

世中はいづれかさしてわがならむ行とまるをぞやどゝさだむる

相坂の嵐のかぜはさむけれどゆくゑしらねばわびつゝぞぬる

風のうへにありかさだめぬちりの身は行ゑもしらず成ぬべらなり

家をうりてよめる　伊勢

あすかゞはふちにもあらぬ我宿もせにかはり行物にぞ有ける

つくしに侍ける時に、まかりかよひつゝ、ごうちける

人のもとに、京にかへりまうできて、つかはしける　きのとものり

故郷はみしごともあらずおのゝえのくちし所ぞこひしかりける

女ともだちと、物がたりして、わかれてのちにつかはしける　みちのく橘くすはおが女

あかざりし袖のなかにやいりにけむわがたましひのなきこゝちする

寛平御時に、もろこしのはう官にめされて侍ける時に、東宮のさぶらひにて、をのこども、さけたうべけるついでによみ侍ける　ふぢはらのたゞふさ

なよ竹のよながきうへにはつしものおきゐて物をおもふ比かな

題しらず　よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつ田山よはにや君がひとりこゆらん

ある人、この哥は、昔やまとのくになりける人のむすめに、ある人すみわたりけり、この女おやもなくなりて、家もわるくなり行あひだに、このおとこ、かうちのくにゝ、人をあひしりてかよひつゝ、かれやうにのみなりゆきけりざりけれども、つらげなるけしきもみえで、かうちへいくごとに、おとこの心のごとくにしつゝ、いだしやりければ、あやしとおもひて、もし、なきまにこと心もやある、とうたがひて、月のおもしろかりけるよ、かうちへいくまねにて、せんざいのなかにかくれてみければ、夜ふくるまで、ことをかきならしつゝ、うちなげきて、このうたをよみてねにければ、これをきゝて、それより又、ほかへもまからずなりにけり、となむいひつたへたる

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたの山におりはへてなく

忘られん時しのべとぞ濱千鳥ゆくゑもしらぬあとをとゞむる

貞觀御時、万葉集は、いつばかりつくれるぞ、ととは

せたまひければ、よみてたてまつりける　文室ありすゑ

神な月時雨ふりをけるならのはの名におふ宮のふることぞこれ

寛平御時、哥たてまつりけるついでに、たてまつりける　大江千里

あしたづのひとりをくれてなくこゑは雲の上まできこえつがなん

人しれずおもふ心は春霞たちいでゝきみがめにも見えなん

哥めしける時に、たてまつるとて、よみて、おくにかきつけてたてまつりける　伊勢

山河のをとにのみきくもゝしきを身をはやながらみるよしもがな

古今和歌集巻第十九

雑躰哥

短哥

題しらず　よみ人しらず

あふことの　まれなるいろに　おもひそめ　わが身はつねに

あまぐもの　はるゝ時なく　ふじのねの　もえつゝとはに

おもへども　あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ

わたつみの　おきをふかめて　おもひてし　おもひはいまは

いたづらに　なりぬべらなり　ゆく水の　たゆる時なく

かくなわに　おもひみだれて　ふるゆきの　けなばけぬべく

おもへども　えふの身なれば　なをやます　おもひはふかし

あしびきの　山したみづの　こがくれて　たぎつごゝろを

だれにかも　あひかたらはむ　いろにいでば　人しりぬべみ
すみぞめの　ゆふべになれば　ひとりゐて　あはれ〳〵と
なげきあまり　せむすべなみに　にはにいでゝ　たちやすらへば
しろたへの　衣のそでに　をくつゆの　けなばけぬべく
おもへども　なをなげかれぬ　はるがすみ　よそにも人に
あはむとおもへば

ふるうたたてまつりし時のもくろくの、そのなが哥　つ　ら　ゆ　き

千はやぶる　神のみよゝり　くれ竹の　世々にもたえず
あまびこの　をとはの山の　はるがすみ　おもひみだれて
さみだれの　そらもとゞろに　さよふけて　山ほとゝぎす
なくごとに　たれもねざめて　からにしき　たつたの山の
もみちばを　みてのみしのぶ　神なづき　しくれ〳〵て
冬のよの　庭もはだれに　ふる雪の　猶きえかへり
年ごとに　時につけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ

きみをのみ　ちよにといはふ　世の人の　おもひするがの
ふじのねの　もゆるおもひも　あかずして　わかるゝなみだ
ふぢごろも　をれる心も　やちくさの　ことのはごとに
すべらきの　おほせかしこみ　まき〳〵の　中につくすと
いせの海の　うらのしほかひ　ひろひあつめ　とれりとすれど
玉のをの　みじかき心　おもひあへず　猶あらたまの
としをへて　大宮にのみ　ひさかたの　ひるよるわかず
つかふとて　かへりみもせぬ　わがやどの　しのぶぐさおふる
いたまあらみ　ふるはるさめの　もりやしぬらん

ふるうたにくはへて、たてまつれるながうた　壬生忠峯

くれ竹の　よゝのふるごと　なかりせば　いかほのぬまの
いかにして　思こゝろを　のばへまし　あはれむかしべ
ありきてふ　人まろこそは　うれしけれ　身はしもながら
ことのはを　あまつそらまで　きこえあげ　するのよまでの

あとゝなし　今もおほせの　くだれるは　ちりにつげとや
ちりの身に　つもれる事を　とはるらむ　これをおもへば
けだ物の（忠峯集哥これをおもへばいにしへにくすりけがせるだものの）　雲にほえけむ　こゝちして　ちゝのなさけも
おもほえず　ひとつこゝろぞ　ほこらしき　かくはあれども
てるひかり　ちかきまもりの　身なりしを　たれかは炑の
くる方に　あざむきいでゝ　みかきより　とのへもる身の
みかきもり　おさ〳〵しくも　おもほえず　こゝのがさねの
なかにては　あらしの風も　きかざりき　今は野山し
ちかければ　春は霞に　たなびかれ　夏はうつせみ
なきくらし　秋は時雨に　袖をかし　冬はしもにぞ
せめらるゝ　かゝるわびしき　身ながらに　つもれるとしを
しるせれば　いつゝのむつに　なりにけり　これにそはれる
わたくしの　おいのかずさへ　やよければ　身はいやしくて
年たかき　ことのくるしさ　かくしつゝ　ながらのはしの

ながらへて　なにはのうらに　たつなみの　なみのしわにや
おほゞれん　さすがにいのち　おしければ　こしのくになる
しら山の　かしらはしろく　なりぬとも　をとはのたきの
をとにきく　おいずしなずの　くすりもか　君がやちよを
わかえつゝみむ

君が世に相坂山のいはし水こがくれたりとおもひけるかな　凡河内みつね

多のながうた

ちはやぶる　神な月とや　けさよりは　くもりもあへず
はつしぐれ　もみぢとゝもに　ふるさとの　よしのゝ山の
山あらしも　さむく日ごとに　なりゆけば　たまのをとけて
こきちらし　あられみだれて　しもこほり　いやかたまれる
庭のおもに　むら〳〵みゆる　冬草の　うへにふりしく
しらゆきの　つもり〳〵て　あらたまの　としをあまたも
つくしつるかな

七條のきさき、延喜七年六月八日崩卅六 うせたまひにけるのちによみける　伊勢

おきつなみ　あれのみまさる　宮のうちは　年へてすみし
いせのあまも　舟ながしたる　こゝちして　よらむ方なく
かなしきに　涙の色の　くれなゐは　われらがなかの
しぐれにて　秋のもみぢと　人々は　をのがちり〳〵
わかれなば　たのむかげなく　なりはてゝ　とまる物とは
花すゝき　君なき庭に　むれたちて　そらをまねかば
はつかりの　なきわたりつゝ　よそにこそみめ

旋頭哥

題しらず　よみ人しらず

うちわたすをちかた人にもの申すわれそのそこにしろくさけるはなにの花ぞも

返し

春さればのべにまづさくみれどあかぬ花まひなしにたゝなのるべき花のなゝれや

題しらず　つらゆき

はつせ河ふるかはのへにふたもとあるすき年をへて又もあひみむふたもとあるすき

きみがさすみかさの山のもみちばのいろ神な月しぐれのあめのそめるなりけり

誹諧哥

題しらず　よみ人しらず

梅花みにこそきつれ鶯のひとく〳〵といとひしもをる　素性法師

山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして　藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさをあさな〳〵よぶ　藤原兼輔朝臣

七月六日、たなばたの心をよみける

いつしかとまたく心をはぎにあけてあまのかはらをけふやわたらむ

題しらず　凡河内みつね

むつごともまだつきなくにあけぬめりいづらは秋のながしてふよは

秋のゝになまめきたてるをみなへしあなかしがまし花もひとときｘ　僧正へんぜう

あきくればのべにたはるゝ女郎花いづれの人かつまでみるべきｘ　よみ人しらず

秋霧のはれてくもればをみなへし花のすがたぞみえがくれする

花と見ておらむとすれば女郎花うたゝあるさまのなにこそありけれ

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　在原むねやな

秋風にほころびぬらしふぢばかまつゞりさせてふ蕁なく

あす、春たゝむとしける日、となりの家の方より、風のゆきをふきこしけるをみて、そのとなりへ、よみて

つかはしける　清原ふかやぶ

冬ながら春のとなりのちかければなかゞきよりぞ花はちりける

題しらず　よみ人しらず

いそのかみふりにしこひの神さびてたゝるに我はいぞねかねつる

枕よりあとより戀のせめくればせむ方なみぞとこなかにをる

こひしきがかたもかたこそありときけたてれをれどもなき心ちかな

ありぬやと心みがてらあひみねばたはぶれにくきまでぞこひしき

耳なしの山のくちなしえてし哉おもひの色のしたぞめにせん

葦引の山田のそほづをのれさへ我をほしてふうれはしきこと　きのめのと

ふじのねのならぬおもひにもえはもえ神だにけたぬむなしけぶりを　きのありとも

あひみまくほしはかずなく有ながら人につきなみまどひこそすれ　小野小町

人にあはむ月のなきには思をきてむねはしりびに心やけをり

寛平御時、きさいの宮の哥合のうた　藤原おきかぜ